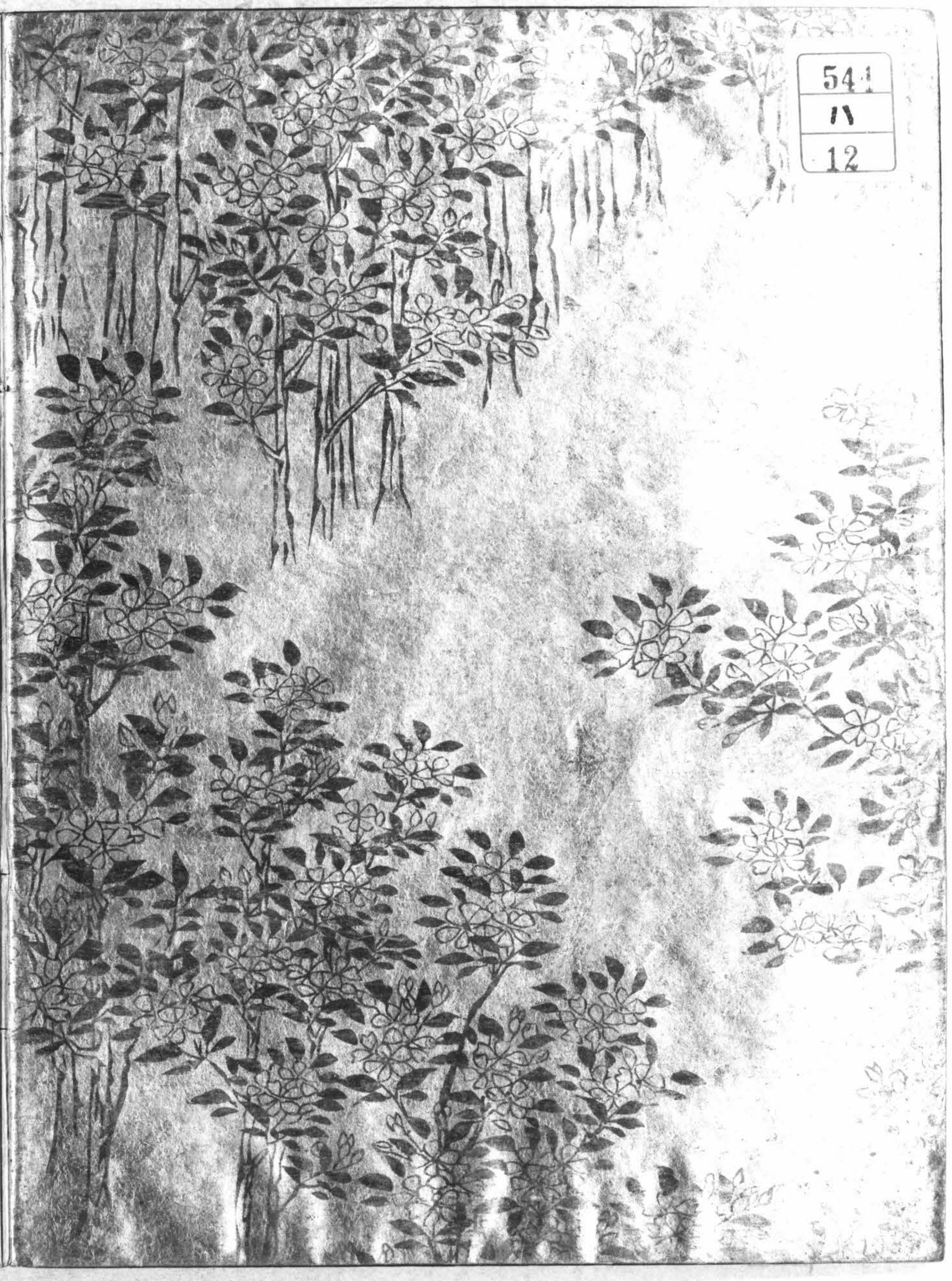
新古今和歌集　下

544
ハ
12



541
八
12

九州大學圖書

九州大學圖書館
昭和 24. 3. 19
182173

新古今和歌集巻第十一

戀哥一

題不知　　読人不知

よそにのみ見てやゝみなむかつらきやたかまの山のみねの白雲
をとにのみありとききこしみよしのの瀧はけふこそ袖におちけれ

人麿

あしひきの山田もるいほにおくかひのしたこかれつゝわかこふらくは
いそのかみふるのわさ田のほにはいてす心のうちにこひやわたらん

女につかはしける　　在原業平朝臣

かすかのゝわかむらさきのすり衣しのふのみたれかきりしられす

中將更衣につかはしける　　延喜御哥

むらさきの色にこゝろはあらねともふかくそ人をおもひそめつる

題しらす　　中納言兼輔

みかのはらわきてなかるゝいつみ川いつみきとてか戀しかるらん

平貞文か家哥合に　　坂上是則

そのはらやふせやにおふるはゝき木のありとはみえてあはぬ君かな

人の文はかりして侍るにことのよしみえてせよ
つかはしける　　藤原高光

としをへておもふ心のしるしにそそらもたよりの風は吹ける

九条右大臣女にはしめてつかはしける

西宮左大臣

とし月はわすれかへるをわすれしにし心のうちすこし有けれ
ぬし

大納言俊賢母

もみぢはおなじにほひにちりぬれど人そとかむる秋のなかや
なし

天暦御時蔵人令　中納言朝忠

人はてよとてせてしかれかくれぬのみまちまうものとこそやかく
ちとせをせきつかりける

太宰大弐高遠云

みこもりのぬまのみくさはてみつれどいつもかはらぬねを秋に
いつもきゝたるほとゝきす

順徳云

かすみにもいるめくりこそよそに渡るあふみ
左大将朝光卿の歌所にてよみ侍る
かつまたをみてつかりける

前大納言公任

あまのはらよのあかしふよみの人のなかなるみの空おそきま
つれなく侍るさまにハすの嶋につかりける

順徳云

あさましやまさてみちなるハ我こゝろにてあふ坂の関
堀河関白みころとつかりてさやハいつくろと

とひ侍けれは　本院侍従

わか宿にさくるまつ花さかりにいはてこそあまたねぬやと

せし　忠義公

わか思ひのなかにとたゆるわさは雲のかよひちたえなてん

影しけ　紀貫之

きまろかなかまに雲にまかへてよそにそみつる山ともみえ

けさよりはかなしきねとも人まれにかはりし人のおもひのえそちく

清原深養父

きやうさりける　藤原惟成

風ふかはむかしの中の思ひの人のみにたちけるかな

久しかりきゝはめたりつゝすみゑんさる人か

よそときてそはかりしける　藤原義孝

たつ雲のゆくへかはるとかなしむもおもはて大かたの山のはの月を

出いしゝと　和泉式部

けふも又かくやいふきのさしもくささらはわれのみもえやわたらん

源重之

つくは山はやましけ山しけゝれとおもひいるにはさはらさりけり

またかたらふ人あまたある女のもとにつかはしける

大中臣能宣

守らぬ人は空をはなれし山寺にかよひし道さへやみ
ちし草葉につゞりける

大江道衡朝臣

金札に立よる心あれは今のよのわすれやさらむ
花とよむしよみのひみてつゞりける

清原元輔

山寺にて春のしみさくら花咲りて打まきれ
としをへて春しらぬ人もさくらの木のさすらに春
ちかくはあかさかなまけるのどもつゞりける
りしまたる

能宣朝臣

いく春もきさらぎあさへあて袖もにほひもとまりあかなん

題しらす

躬恒

たくひのねぶとひゆる福のふのさくはなみてや咲み南

亭子院御製

たなはたをなかきみの契るまれやともしのかゝしてのとけるを
正月雨ふる日よまきりけるとよみつかりしまる

源[illegible]云

春風の吹かさるまなみそうかしみかけもめとれ
きりてそしせぬ女

水のうへよりはるかなるみちまちくもつゝさはさきたち紙

題しらず　　　壬生忠岑

かゝとのみ雲ゐになほまさる草の葉のさゝへて人のこゝろは
色しせぬめのとふつゝきて人のよにせむ
佗れは二月あまりのみ佗ける

よみ人しらず

あさまたき草のうへにおきてけさきえむ露のいのちを
題しらず　　　藤原興風

霜のうへにふるしら雪のきえかへりおもひそ
中納言家持

秋萩の枝もとをゝにおく露のけさきえぬとも色にいてめや

藤原高光

秋風にふきかへされてくずの葉のうらみてもなほうらめしきかな
野の草のうへにみちたる白露のきえ
つゆしけゝ　　　花園左大臣

ゆふされは今は秋とやなれぬらむ野のまかきにしのふくさの
秋萩の枝にさきもとへ思ふとそ　　　後徳大寺左大臣

いそのかみふるの神杉ふりぬれと色にはいてす露もしくれも

小野宮殿にて恋の心を　　　太上天皇

わか恋はまきのしたはにもる時雨ぬるとも袖の色にいてめや

百首歌よみ侍りける時よめる

前大僧正慈円

わか恋は松を時雨のそめかねてまくすかはらに風さわくなり

家に百首歌合し侍りける時恋の心を

摂政太政大臣

うつせみのなくねやよそにもりの露ほしあへぬ袖を人のとふまて

寂蓮法師

思ひあれは袖にほたるをつゝみてもいはゝやものをとふ人はなし

水無瀬にて恋十五首歌合に夕恋といふことを

又侍りしに　太上天皇

思ひつゝへにける年のかひやなきたゝあらましの夕くれの空

百首歌中に忍恋を

式子内親王

玉のをよたえなはたえねなからへはしのふることのよはりもそする

忘れてはうちなけかるゝ夕かなわれのみしりてすくる月日を

わか恋はしる人もなしせく床の涙もらすなつけのをまくら

百首歌よみ侍けるに忍恋

入道前関白太政大臣

しのふるに心のひまはなけれともなほもるものは涙なりけり

冷泉院みこの宮と申しける時さふらひける
女房をみかはしてはへりける侍ところに
ねらしけるをまかりてよるにつけ
侍りける　源道済
てらしとるえとも頼めしもえんとされしもの人に
色し　よみ人しらす
あふことはたのまれやむもあはれにてみてもや人そ
題しらす　紀貫之
いのちをそとすみいそかれやすきそのつくはね
道信朝臣

とよのあかりのせちゑのよとまかはすにまかりける
くさたかきをなつかしみてなくこゑかけて
三条院女蔵人左近
ねやよりもつねもあやめに心みてしるらむやとも
五月五日馬内侍につかはしける
ひとしれぬつけあやめ草ねはいつるをしらねはかくすらむ
前大納言公任
色し　馬内侍
きみをのみたのむるすつくるとこそしれ人もとかめ
兵衛佐に侍りけるとき五月はかりによるの

おもしろきにてつくりける　清輔朝臣袋草紙に云此歌は
都にこゝろをとめけるとみゆる心よりおもひやられぬるところ也
也し　　　　　　　　　　　　馬内侍
都にはのこるよかしはいまのかたにもうちもよをまさらしもあらし
なくさますのかけつるはきてやとおもひける人こそ
心のまゝにはらからつけるとおもひ入るのあはれところかな
題しらす　　　　　　　伊勢
天つよのさらしおもちて濁ならされとはなされこそまたれてこそ
難波かたみしかきあしのふしのまもあはてこのよをすくしてよとや
人麿
みかりするかりはのをのゝならしはのなれはまさらてこひそまされる
よみ人しらす
うとまぬのみとくのきやかまとはるゝ涙のひかりおもひつゝかな
東路のさやのなかやまなかなかになにしか人をおもひそめけむ
なこそとのせやんとこそかきとめいそさのみつけそとさせよし
時雨するみかさの山のはなかさゝりのあかさ人の袖そわかまつ
おもくのそれとまてもわか宿かは袖よそけしもみてこそ
水くきのあとのくきやすきこそわかはまみさとこひし
わか袖にあかすつけし涙する道まかせしみそれもまたのむし
あまとかわたつおもひけるかなしさくするいつくそと

あらたまれは　中納言定輔

冬のよのねさめてきけは神の心とけてや人ゆるされ

題しらす　藤原元真

霜こほる心もとけぬ冬の池によふけてそなく鴛の一こゑ

うそ川かくれなるれきぬは人のきゝおほえ

すやりける　藤原実方

いかにせむくらゐの山の木かくれてやまとやは

世のなかをいとひすてゝきたれは

あれこのみまみかりもとてろく心のほとみえるとある

題しらす　小弁

わかなみはいかにおもへは日頃のはなみえてとよそなけ

伊勢

わかなみをあかぬのあの風にて見えてまよはすおもふ浪のまには

人につかはしける　藤原清正

すまの浦にあまのかるもにむすふてなみもかなわ

題しらす　源景明

あかなくにまたきも月のかくるゝか山の端にけて入らすもあらなむ

貫之

あしひきの山のしたゆく水のみなもとの人を心にかけて今日くらしつ

ちくさの山の下ゆく水のみなもとをさかす

坂上是則

なつふかき夜はの峰のみちとるみよしのゝ山にまよふまつ

参議雅忠

かやり火の末けふりの竹こそれとやかての人をまちたきつの

ゆふのこせたら舟人からさとてかすかにまたぬ道の岸

あるねしのの比時に人のそこかこと夢はの見えに心

なとよ人侍もる　権中納言師時

たひねしや八の塩境を行舟のよそにいはぬ人まてる

あさ千年ともの時　按察大臣

からさとてゆふの海をみわたせはたつあまつねにさかは世風

影しらと　式子内親王

ちる人もよはあるねすてに流しむく身も秋そしらすちるやへの桜風

権中納言長方

きのふやねりみ人もとよりふたてよなさくにおもへかや

法性寺入道前関白太政大臣家哥合に

権中納言師俊

あはれなりし人の心のうつしえはわかのはれのむねとさくらる也

和哥不知今出思ふともある

按察大臣

あまの人いさなえよとなれそしあふうちよみとつらて

隠恋の心を　皇太后宮大夫俊成

あまのかるみるめをなみにまかへつゝなくさのはまをたつねわひぬる

題しらす　相模

あふまてのみるめかるへきかたそなきまたなみなれぬいそのあま人

業平朝臣

みるめかるかたやいつくそさをさして我にをしへよあまのつり舟

新古今和歌集巻第十二

恋歌二

五十首歌たてまつりしに寄雲恋　皇太后宮大夫俊成女

したもえにおもひきえなむけふりたにあとなき雲のはてそかなしき

摂政太政大臣家百首歌合に　藤原定家朝臣

なひかしなあまのもしほ火たきそめてけふりはそらにくゆりわふとも

百首歌たてまつりし時恋歌　摂政太政大臣

ときとのもとよのつね人もかたおりあしく神のこゝろをきゝたまや
ときにつけてもあり　二条院讃岐
みるめこそいりぬるいそのくさならめ袖さへなみのしたにくちぬる
むかしをおもふこひといふ心をよみ侍ける
俊頼朝臣
えたにみとある人のみそおもひしれてのちもまたあふよしもかな
忍恋のこゝろを　前太政大臣
さるあやこのこすゑてあるものしよふかすみし心を
左大将に侍けるとき家にて百首哥合し侍
けるに忍恋の心を　摂政太政大臣
もらすなよ雲ゐるみねのはつしくれこのはゝしたに色かはるとも
忍恋のこゝろをよみ侍ける　後徳大寺左大臣
かくとたにおもふ心をいはせ山したゆく水のくさかくれつゝ
殷富門院大輔
もらさはやおもふ心をさてのみはえそやむましきあまのしほやく
忍恋の心を　近衛院御製
こひしともいはて心のゆくへをはしらしや人のあはてやむむかし
見不飽恋といふ心をよみ侍ける
花山院左大臣

人しれぬ思ひはつゝみあさ川なれとみるめよるへく波そたつらん

題しらす　神祇伯顕仲

ものおもふといはてねたらは人のそよいてきたる袖の色をは

忍恋心を　藤原清輔朝臣

人しれすくるしきものはしのふ山したはふくすのうらみなりけり

和哥所哥合に忍恋のこゝろを　雅経

きえねたゝしのふの山のみねの雲かゝる心のあともなきまて

千五百番哥合に　左衛門督通光

かきりあれはしのふの山のふもとにも落葉か上の露そいろつく

二条院讃岐

うちはへてくるしきものは人めのみしのふのうらのあまのたくなは

和哥所哥合に依忍恋といふことを　春宮権大夫公継

しのひあまりおつる涙の谷川に袖をせくまこそ水まさりけれ

題しらす　信濃

人もまたふみゝぬ山のいはかくれなかるゝ水を袖にせくかな

西行法師

はるかなるいはのはさまにひとりゐて人め思はてもの思はゝや

かすならぬ心のとかになしはてしゝらせてこそは身をもうらみめ

水無瀬の恋乃十五首の哥合に夜恋を
摂政太政大臣
草ふかき夏野わけゆくさをしかのねをこそたてね露そこほるれ
入道前関白右大臣に侍りける時百首哥
人〻によませ侍りける忍恋のこころを
太宰大弐重家
ほのよそにみしけはなそとふみてさよやせよ上座の
大納言成通中将つかはしけるにちきれるらまゝ
恋をのちみよとてうみのころなきよしや
これハ　讀人しらす
なつきのかよふるくきめてのちみせなてのふかんのとこそ
前大納言隆房中将に侍る時右近馬場のひ
おりの日まかりけるにもの見侍る車よりつ
かはしける
知めしあれハあめそれとちかつるなきハ心そわかる
返し　前大納言隆房
いとねたし心やゆくとてなくへするかむかる人のよそまて
千五百番哥合に　左衛門督通光
ゐなか偲ねる我ハなすよ我をせよ雲のうちの中一葉の元
両弟らり哥つかまつ　皇太后宮大夫俊成

世人わかれたるはみえてきえにけるをまたかゝる

水無瀬恋十五首歌合に　摂政太政大臣

山かつのあさのさころもおさをあらみあはて月日やすきふけるいほ

欲言出恋といへる心を　藤原忠定

おもへともいはて月日はすきの門さすかにいかゝしのひはつへき

恋歌とてよめる　皇太后宮大夫俊成

あふ事はかたのゝさとのさゝのいほしのに露ちるよはのとこかな

入道前関白右大臣に侍ける時百首歌中に

忍恋

ちらすなよしのゝはくさのかりにても露かゝるへき袖のうへかは

題しらす　藤原元真

夏草の露わけころもきもせぬになとわか袖のかはく時なき

たてまつりける　藤原長能

いつまてのいのちもしらぬ世の中につらきなけきのやますも有哉

崇徳院に百首歌たてまつりける時　大炊御門右大臣

わか恋はちきのかたそきかたくのみゆきあはて年のつもりぬるかな

入道前関白家にて百首歌よませ侍ける時不逢恋

恋といふこゝろを　藤原基輔朝臣

いつとなく恋にやあはぬ身なりけんくるしかねあはぬ夜は

久恋といふことをよめる

藤原忠頼

恋しなむわが身のはてやいかならんけふもくれぬと思ひなるらん

旅恋といふことをよめる

藤原定家朝臣

旅寝する秋の袖に吹く風に逢はぬ夜のうらみはすれとてもなるらん

摂政太政大臣家歌合によみ侍ける

寂蓮法師

ありとてもあはぬためしの名取河くちだにはてね瀬々の埋木

千五百番歌合に　摂政太政大臣

なげかずよいまはたおなじ名取河せぜの埋木くちはてぬとも

百首歌奉りし時　二条院讃岐

涙河たぎつ心のはやき瀬をしがらみかけてせく袖ぞなき

摂政太政大臣家歌合によみ侍ける

高松院右衛門佐

よそながらあやしとだにも思へかし恋せぬ人の袖の色かは

読人不知

恋歌とてよめる

きのふまておつる涙をせきかねておきまよふ袖よりきれぬる

入道前関白太政大臣家歌合に

道因法師

それならぬよるみしみやのゆくゆくえといひてとかすくや

百首歌中に　式子内親王

夢にても見ゆらんものを歎つゝうちぬるよひの袖のけしきは

物いひ侍ける女の後にとはすなりにけれはよみ侍ける

後徳大寺左大臣

さきの夜のちきりあすと思ふより六そちのおもひいくやねぬ

千五百番歌合に　摂政太政大臣

かよふへきその俤をきえるらむ夜はならぬものと思ふくるしさ

題しらす　大納言実家

夜のちきりあすとみえてつれなさこそつれなきよりも袖そぬれける

五十首歌たてまつりしに

前大納言忠良

いのちとはたのまぬ秋ふけてこのよまくる前の道にそ

隔河忍恋といふ事を　正三位経家

きのふまてあまのかはせにこえもせてよそのはしをや秋をそまちける

とおもはさりしをはしといへる

賀茂重政

まつのあけんとおもひ入る山のはへの雲みえすなりゆく

摂政太政大臣家百首歌合に

中宮大夫家房

あふ事はいつといふきのみねにおふるさしもたえせぬ思ひなりける

家隆朝臣

ふしのねのけふりもなほそ立のほるうへなき物は思ひなりけり

権中納言俊忠

つれなきのよそにみえし山にも雲のゐてもしられぬるをふとき

ふもとに中よ恋のもとるそ

惟明親王

あふ事のむなしき空のうき雲は身をしる雨のたよりなりけり

右衛門督通具

わか恋はあふをかきりのたのみたにゆくゑもしらぬ空のうき雲

水無瀬恋十五首歌合に春恋を

皇太后宮大夫俊成女

おもかけのかすめる月そやとりける春やむかしの袖のなみたに

冬恋

定家朝臣

床の霜枕のこほりきえわひぬむすひもおかぬ人のちきりに

摂政太政大臣家百首歌合に暁恋

有家朝臣

つれなさのたくひまてやはつらからぬ月をもめてし有明の空

和哥所にて寄月恋といふことのこゝろをつかう

まつりし　藤原秀能

袖のうへにたれゆゑ月はやとるそとよそになしても人のとへかし

久恋といふ事を　雅経

夏引のてひきのいとのとしへてもたえぬおもひにむすほれて

家に百首哥合し侍りける祈恋といふこゝろ

を　摂政太政大臣

いくよわれなみにしをれてきふね川袖に玉ちるものおもふらん

定家朝臣

年もへぬいのるちきりははつせ山をのへのかねのよその夕くれ

皇太后宮大夫俊成

うきみをはわれたにいとふいとへたゝそをたにおなし

心とおもはむ　権中納言長方

恋しなむおなしうき名をいかにしてあふにかへつと人にいはれん

殷富門院大輔

あすしらぬ命をそおもふおのつからあらはあふよをまつにつけても

八条院高倉

つれもなき人の心はうつせみのむなしき恋に身をやかへてむ

西行法師
なにとなくさすかにをしきいのちかなありへは人やおもひしるとて
おもひしる人ありあけのよなりせはつきせす身をはうらみさらまし

新古今和歌集巻第十二
恋哥二
中関白かよひそめ侍けるころ
儀同三司母
わすれしの行すゑまてはかたけれはけふをかきりの命ともかな
忍ひたる女をかりそめなる所にゐておきてかへりて
あしたにつかはしける
謙徳公
かきりなくむすひおきつる草枕いつこのたひを思ひわすれん
題しらす
業平朝臣
おもふにはしのふることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれ

人のもとにまかりそめてあしたにつかはしける

廉義公

きのふまてあふにしかへはとおもひしをけふはいのちのをしくもあるかな

式子内親王

あふ事をけふまつかえの手向草いくよしほるゝ袖とかはしる

頭中将に侍ける時五節所のわらはにもの申そめてのちたつねてつかはしける

源正清朝臣

こひしさにけふそたつぬるおく山の日影の露に袖はぬれつゝ

題しらす

西行法師

あふまての命もかなと思ひしはくやしかりけるわか心かな

二条院讃岐

人心うすはなそめのかりころもさてたにあらて色やかはらむ

藤原興風

あひ見ても猶なくさまぬ心かないくちよねてか恋はさむへき

元方朝臣

るゝくのよに思ひそめてねぬるよの夢もえやはみえて世

このひさる人となりにて

伊勢

夏衣人にかはれぬるも見えたなかくそをもねむとてはた

題しらす　　和泉式部

梅か香はしねはいりたへあかつきにえらるれよ春のよのやみなゝ
人よおもひりせ　　馬内侍

やとれとも人よかはらぬたてねのさとみそはまつわすくさくし
せまつゝりけら　　藤原範永朝臣

つらかりしおほくの年はわすられて一夜の夢をあはれとそみし

題しらす　　三条院御製

とはれぬはいとゝおもひをかさねてあけさらむ逢坂の山

初逢ところとて　　俊頼朝臣

あしの屋のこやのつまとはしらねとも心やすくもうちとくるかな

題しらす　　読人しらす

かりそめのこの世の中の草枕あすとも人にかたられ
人もなきのちのはかなさをかたちとちらすとき
きる人につかりしきる

相模

いつとてもかはらぬ秋の吹秋風に草葉の露みたれける哉

題しらす　　実方朝臣

わかるゝはかなしきみのうきなみたの袖のぬれて見はてし

伊勢

あふ事のかたゝかへなるは我こそ人に心やすくゆく

九月十日あまりよふけてまて和歌所にかたらひ
たゝ世侍りつるまてけふなれはあかつき
にはかへりまゐる　太宰師教通朝臣
秋のよの有明の月の入までにやすらひかねて出ぬる
題しらす　道信朝臣
心もあるわか身のかなしみちのくのえもきこえぬ人
返し更衣に給はせまゐる
延喜御製
こぬれくはなほまゐれ君か我そのとよそのくらへきこえまゐらせまゐる
御返し
更衣源周子　右大弁唱女
秋霧のたちつゝも秋れときてたつらこそ人
題しらす　円融院御製
さまよひなかやよひのなかさいはゝきしねとはるなりまさ
讃徳公
なかひとつかくもれ君かもつおもひつきくの上の御
清慎公
むかしのよの花をさかりといふ人こそあはぬる
夜のよのまよ（ひ）に侍りける人こそあはぬる
かとよひとけくおほて侍るなれはなみ
藤原清正
侍まつる

人か来ぬおまへくはひはかなきよしをきかまほしくてあまりの花
せみしかとひきあてわらはにつかはしける

大納言清蔭

あくといへはしつ心なき春のよの夢とや君をよるのみはみん

やよひのころをんなのもとにつかはしてこゝろ傳へ
きみ人のきさいへいとものおもはしけれはよしや
つかはしける　　和泉式部

言ははしけれはよしなしとてもきみの上に夏そなくそ人そ

題しらす　　東宮右近

心つきりとてもふみつゝ来まのくれかすつまさへきれ
土のひさしあかつきあくまてつかはしける

九条入道右大臣

やすらひて空に心かゝるをさまもなきとそをしらぬわかみ上

小八条宮にまゐつかはしける　　亭子院御製

なよ竹のかせる夜のなけきはおもはねとれて流るるなみ

題しらす　　藤原雅正

ありあけの来はなきる月の有明の月は人まとふなる
前栽の花をききくさせとてとるとて人すゝるものを
ふもとせし　　実方朝臣

たのみてし人ハ袖のしぬれていとゝしく草葉の露みたれやまさらん

二条院御時嘆欲逢恋といふことを

二条院讃岐

おもはれとまつはきかねてゐるよりや人の袖をもぬらしつらん

題しらす　　西行法師

なけけとてかほにかゝれるなみたをは人の月まとはせて

後朝恋の心を　　摂政太政大臣

又ことむ秋をものゝ床すちよそてし春の比かな

世のもとまかれてうちのまいらせ侍る時は

えんてつかふしける　　賀茂重保

よしやさてうきよの外のすみかにもならはしつゝやおもはましかハ

世のさとよ袖のそほちもいとゝしくさらぬわかれのなかまりつゝ

むすほゝれてかくし

左大将朝光

きえはてのあはれのはなのわかれてはこゝろにしみてはのつゆ

三条関白女御入内のあしたつかはしける

花山院御製

朝ぼらけおきつる霜のきえかへりくれまつほとの袖をみせはや

法性寺入道前関白太政大臣家歌合に

藤原道経

庭よおもしろく夕付草の露やみたれて中々よの涙はもと

題しらす　小侍従

まちよひの更行鐘のこゑきけはあかぬわかれの鳥はものかハ

藤原家隆

こぬも又まつにわかれなるらむやとおもひしくれ待すなきぬれ

西行法師

有明ハ思ひ出あれや横雲のたゝよはれつる東雲の空

清原元輔

大井川ゐせきの水のわくらはにけふはたのめしくれにやはあらぬ

けふと契りける人のあるかとひて侍りけれハ

読人しらす

夕くれハいのおける空のこゝろやあるやとまつもなし

西行法師人々すゝめて百首歌よませ侍りけるに

定家朝臣

あちきなくつらき嵐のこゑもうしなと夕暮にまちならひけむ

恋歌とて

太上天皇

たのめすハ人をまつちの山なりとねなましものをいさよひの月

水無瀬にて恋十五首歌合に夕恋といふ心を

摂政太政大臣

なにゆへと思ひもいれぬ夕へたにまち出しものを山のはの月

寄風恋　　宮内卿

きくやいかにうはの空なる風だにも松におとするならひありとは

題しらす　　西行法師

人はこで風のけしきもふけぬるにあはれに雁のおとづれてゆく

八条院高倉

いつも[illegible]あかつきの[illegible]の松風のこゑ

鴨長明

たのめおく人もながらの山にだにさよふけぬれは松風のこゑ

藤原秀能

今こむとたのめしことをわすれずはこの夕ぐれの月やまつらん

待恋といへる心を　　式子内親王

君まつとねやへもいらぬまきの戸にいたくなふけそ山のはの月

恋のうたとてよめる　　西行法師

たのめぬに君くやとまつよひのまのふけゆかでたゞあけなましかは

定家朝臣

かへるさのものとや人のながむらんまつよながらのありあけの月

題しらす　　読人しらす

君こむといひしよごとにすぎぬればたのまぬものゝこひつゝぞふる

人麿

ころもでに山おろしふきてさむきよを君きまさずはひとりかもねん

たゞ人将ねざんひとしくそをとつれ侍りてこそひろう
ふりきおもひてよそのるかれハ草をもむすひ
てもつらふ　　馬内侍
ある事ハこれやかうらみさへん草の枕も霜かれなむ
天暦御時まもとゑよあれやと侍りけれハ
　　　　徽子女王
ふれゆくこゝろかせるゝれやとよのおもひのきえやすきひとを(?)とも　時(?)かし
おもてのらあひてきやす
　　　　坂上是則
きのふまて秋の野中みえしすゝきのこゝろまかせるるを(?)もの(?)ゝしも侍
三條院の御子宮にまゐりける時久しくとえせ給
ハおほくなれハ　　安法々師女
よの中の秋をみるこそ萩のうへにはおくつゆハきえてやあらん
題しらす　　中納言家持
あひ見ての後み(?)けるまかきハ今もきえて忘れはてん逢よもさらに
　　　　延喜御門
東路にゆきてみやこをわすれつつのこるこゝろやわすれかねん
　　　　権中納言敦忠
むかし見しはなもとこそあれ見し人の花をみるらん中将(?)としをそ
ろうし侍中将
　　　　源重之

霜のうへにまさる雲みさむされハおもひて人をつらしと云

題しらす　安法法師女

むかしよりおもひし前の世のかきおもひとよのねさめてし

源重之

山しろのよわさこしのまよて袖ぬれぬとハかなしさくらかな

貫之

かけておもふ人もなけれとゆふされハおもかけたえぬ玉かつらかな

宮つかへし侍ける女をとてひさしく侍りけるにやむ

ことなきところのいはてもそいはてすきぬとこそ

きこえけれハおもひいてゝいみしくなきてよみ侍

ける　　平貞文

偽をたゝすの森のゆふたすきかけつゝちかへ我をおもはゝ

人につかはしける　参議雅経

いさやまたかりにもしらぬこひのみしてわかこひしさを人にしらせん

片思の心を　入道前関白太政大臣

我のみそおもひこかるゝ人やあるとなけきのもりのあはぬよ

摂政太政大臣家百首歌合に

前大僧正慈円

たのめぬにたれをかまつとみえつらんたゝしハおもひねてこそゆめの

ちきりとハまつしとやとてのちかな

ますれくくねたくそれハつかりける

左衛門督家通

はましとかすみのまてまのとりしもまたねぬなかおもへ
さのむらことにもろかまてしもたにもしも
たゝらて久我内大臣みともつかりける

後人しら次

たのめこしことのはかりをあやにくにしのふるおもひまけなまし　八

色し　久我内大臣

あはれともいはまくほしきのまつやなね　八

忌しく　小侍従

つけるもうみねまてまよはすかなしくぬ人も　なくれ

殷富門院大輔

なさいはよもまてうちのをやみさえらんぬなかに

刑部卿頼資

ならちむいのちをわすれてまたせんおもいなけ　思ひ

西行法師

おもれて人の心みたけあれはおもはぬなみたけれ
かえりし人のとうとも思いぬよらみたなしぬれて袖

皇太后宮大夫俊成

よしさらハ後の世とてハいつみあまたけつきしぬかもことに　なき

題し

藤原定家朝臣母

たのめおかむたゝさはかりの契にてうき世の中の夢となしてよ

新古今和歌集巻第十四

恋哥四

中将に侍ける時哥たてまつりける

清慎公

よひ〳〵に君をあはれと思ひつゝ人にはいはてねをのみそなく

題し

よみ人しらす

忘なは昔にそへてくらさましなきをまつるこゝろか

少将滋幹につかはしける

こ乱しさにまさるいのちのなき昔とて今はかきりとなる

うきよのことも傳くさてよまえてゝとちられて

二日とらふあかつきつかはしける
返信云

わかれてはきのふけふこそへたてつれちよしもへぬる心ちのみする

返事　恵子女王　贈皇太后宮母

きのふともけふともしらす今はとてわかれしほとの心まとひに

入道摂政ひさしくまうてこさりけれは
ておかれたりけるゆするつきの水草ゐて侍るを
見て　右大将道綱母

たえぬるか影たにみえはとふへきにかたみの水はみくさゐにけり

内にさふらひしく御覧しよりかくるゝころ五月
五日後朱雀院の御事にて　陽明門院

かくしつゝかれてあやめ草あやめぬれともやはらまし人と思はし

返しに　伊勢

ことしのつらさはあやめのねをいとゝそまさるらん

右大将道綱母

吹風につけてもとはむさゝかにのかよひし道はそらにたゆとも

きさいの宮にさふらひしく宮にたえにけるころ
つかはしける　天暦御製

くものうへにあらぬわか身も秋風の吹くにつけつゝみえたる

こゝろくまなくみえける人に　　延長御哥

霜さやく野への草葉にあらねともなと人めのかれまさるらむ

御返事　　　読人しらす

何すとか人やかくれん山里の野の草葉もむかしからには

まてあるにと奏し侍るかはなにかうちかれ八

ふかくおもひかしこねやとのうま八

せられけれは御返事とをとえてのちみられしまて

女御徽子女王

かすしらぬなけきをつむる時雨にて秋のもみち葉そなき

御返事　　　天暦御哥

いはまむすふみつのあてかことのえとよむかなふるはまなれ

女御のこもりて侍りけるにつかはしける

朱雀院御哥

玉緒の途くちてあれなるとてみるよまとふかな

御返事　　　女御熙子女王

昔より心にかゝるものはなきにあやなくかくれはかなし

醍醐殿女御にまいりて後雨のふり侍りけるひめ

つかはの女御に　　　後朱雀院御哥

春雨のふるにつけてもあさやかの人や来ぬ

返事　　　　　　　　　　　　女御藤原生子

青柳のいとみだれたるこの比はひとすぢにしもおもひよられじ

又つかはしける　　　　　　　後朱雀院御製

あをやぎのいとはかたかくなびくとも思ひそめてん色はかはらし

返し　　　　　　　　　　　　女御藤原生子

あさみどりふかくもあらぬあを柳は色かはらしといかでたのまん

ゑやうねまゐりよりておもひなどみあれの

ひつかはしける　　　　　　　實方朝臣

いかへのまつひと人をとゝむるけしきのおもひにはえね

返し　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

なけくあまためくみてぬれおもはれぬ人とやものゝつゝけん

いつきの宮すみにつかはしける　　天暦御製

あふことはかたよそへて月をみておもひやるらんやはおもひしらるゝ

題しらず　　　　　　　　　　伊勢

さらしなやをはすて山のありあけのつきすもものをおもふころかな

中務

いつとてもあはれとおもふをねぬるよの月はおほろけなくなくそ見し

躬恒

さらしなの山よりほかにてる月もなくさめかねつこの比の空

よみ人しらず

あまのはらちりもなくはるる月はいへ人しもみえかくれ
かのみゆる月をこひしと思ふらむ空のなかにおくれてそてる

人よつかりしきまゝ　　紫式部

いかにしてかはやまのはにけらし月影をしらぬとこしのかたをさらに

返し　　　　　よみ人しらず

さしてゆく山のはもみな雲のかくるゝ心のうちにすめる月かな

題しらず　　　藤原範綱

いかにしてかくれぬよの月をそひとりよそにみてあやなし

肥後

なにはけの空にしらぬ人にまつはいつかきちの秋のよの月

後徳大寺左大臣

うき人の月をみるらんとおもひやるにも袖ぬらしつゝあかす

西行法師

月のいろやそらの光にみかれて昔をそふ心なはし
なきものにおもふを人とはいまそ心を月にやどしつる
おなしくもこころの月のかけそふるいにしへをおもふ人

一条院皇后宮

くもりなきこころは月にちかくとも人のおもかけ

太上天皇

なかそらの中に

はすゝきまねく袖の村雨につれてもくもる山の月かな

千五百番歌合に　摂政太政大臣

めくりあはんかきりはいつとしらねとも月なへたてそよそのうき雲

わすらるゝ身をしる袖にやとる月さても今のけハみえねと

たのむかけて涙やおとしひかりかはるおもやの月影

権中納言公経

いくめくりそらゆく月もへたてきぬちきりし中はよそのうき雲

左衛門督通光

いまこむとちきりし事ハ夢なからみし夜ににたる有明の月

右衛門督通具

有家

わすれしといひしはかりのなこりとてその夜の月はめくりきにけり

摂政太政大臣

思ひいてゝよなよな月にたつねすはまてとちきりし中やたえなん

家隆朝臣

わするなよ今ハ心のかはるともなれしその夜の有明の月

法眼宗円

そのまゝに松のあらしもかはらぬをわすれやしぬるふけし夜の月

藤原秀能

今そうきたのめぬ月ハめくりきてむかしわすれぬ蓬生の月

八月十五夜和歌所にて月前恋といふこ
とを　　　　摂政太政大臣
わすらるゝ身をしる袖のむら雨につれなく山の月はいてけり
　　　　　　有家朝臣
こぬ人をまつとはなくてまつよひのふけゆく空の月もうらめし
　　　　　　定家朝臣
松山とちきりし人はつれなくて袖こす浪にのこる月かけ
　千五百番歌合に　　皇太后宮大夫俊成女
ならひこしたかいつはりもまたしらてまつとせしまの庭の蓬生
　経房卿家歌合に久恋を

　　　　　　二条院讃岐
あとたえてあさちかすゑになりにけりたのめし宿の庭の白露
　摂政太政大臣家百首歌合に
　　　　　　寂蓮法師
こぬ人を思ひたえたる庭のおものよもきかすゑそまつにまされる　まさる
　題しらす　　殷富門院大輔
たつねても袖にかくへきかたそなきふかきよもきの露のかことを
　　　　　　藤原保季朝臣
かたみとてほのふみわけしあともなしこしはむかしの庭の荻原
　　　　　　法橋行遍

名おそとは床の涙もしらすよそにされ由会えゝ侍りけれ

摂政太政大臣家百首哥合に

定家朝臣

忘れすはなれし袖もやこほるらんねぬよの床の霜のさむしろ

家隆朝臣

思ふかはことねなくれむ雲よりて心やはらかにおもふの穂人とゝみよ

百首哥奉りし時

摂政太政大臣

いはさりき今こむまての空の雲月日へたてゝ物おもへとは

千五百番哥合に

家隆朝臣

思ひいてよたかかね事のすゑならむきのふの雲のあとの山風

二条院御時艶書の哥めしけるに

刑部卿範兼

忘れゆく人ゆゑ空をなかむれはたえ〳〵にこそ雲もみえけれ

題しらす

殷富門院大輔

忘るなよいまは心のかはるともなれしその夜のありあけの月

西行法師

うとくなる人をなにとてうらむらんしられすしらぬおりもありし

いまそしるおもひいてよとちきりしはわすれんとてのなさけなりけり

建仁元年三月尽日の哥合に遇不逢恋のこゝろを

土御門内大臣

おなしくはむかしのつきのつてまてそのねところをよとはのこせとや

権中納言公経

あはれなる心のやみのゆかりとも見し夜の夢をたれかさためん

右衛門督通具

契きやあかぬわかれに露をきし暁はかりかたみなれとは

寂蓮法師

うらみわひまたし今はの身なれともおもひなれにし夕くれの空

宜秋門院丹後

わすれしのことのはいかになりにけむたのめしくれは秋風そ吹

家に百首歌合し侍ける

摂政太政大臣

おもひかねうちぬるよひもありなまし吹たにすさめ庭の松風

有家朝臣

さゝすはるんと昔やせきころものすそに秋風そ吹

題しらす

よみ人しらす

[illegible]いつも秋なるねさめあるみにしむものそよともなく

西行法師

あはれとてとふ人のなとなかるらんものおもふやとの荻のうは風

入道前関白太政大臣家百首歌合に

俊恵法師

ゆふくれは人をまかねとゆふされは吹風のをとつれて行

題しらす　式子内親王

今はたゝ心のほかにきくものをしらすかほなる荻のうは風

摂政太政大臣

いつもきくものとや人のおもふらんこぬ夕くれの松風のこゑ

前大僧正慈円

心あらはふかすもあらなんよひよひに人まつやとの庭の松風

和哥所にて哥合侍しに逢不遇恋の心を

寂蓮法師

里はあれぬむなしき床のあたりまて身はならはしの秋風そ吹

水無瀬恋の十五首哥合に

太上天皇

里はあれぬ尾上の宮のをのつから待こしよひもむかしなりけり

有家朝臣

ものおもはてたゝ大かたの露にたにぬるれはぬるゝ秋の袂を

雅経

草枕むすひさためんかたしらすならはぬ野への夢のかよひち

和哥所哥合に深山恋といふ事を

家隆朝臣

まれたとくれぬ秋のゆふくれ山かせもこゑねよそにゆく
藤原長能
思ゆふまくれ心のまゝにまちかねてしはしおもふらん山のはの
題しらす　鴨長明
なかめてもあはれとおもへ大かたの秋のゆふくれ
千五百番哥合に　右衛門督通具
ことのはにおよはぬ秋もさもあらはわかれとおもひしよるはなほ
宮内卿
きゝわひぬはつかの秋のさ夜ふけてころもうつなりしの一のやまの下露
摂政太政大臣家哥合に
寂蓮法師
おほかたの秋のきりやまよふらんまつのはかせもよそにゆく松たえみこそ
あさからぬみ侍りける　前大僧正慈円
わが心いかにせよとて人なきやとの秋の夕暮
後鳥羽院御哥　太上天皇
袖の露もあらぬ色にそ消えかへるうつれはかはるなけきせしまよ
宮内卿
むかしおもふ心からかはやとのまにまつむしのねにたえ
家隆朝臣
さみしさはなかなかのこるゆふくれのはなのおもかけの秋風

皇太后宮大夫俊成女

露はらふねさめハ秋のむかしにて見はてぬ夢にのこる俤

摂政太政大臣家百首哥合に寄恋

前大僧正慈円

心こそ行衛もしらね三わの山杉の梢のゆふくれの空

百首哥中に　式子内親王

さりともと待し月日そうつりゆく心の花の色にまかせて

いきてよもあすまて人はつらからしこの夕くれをとはゝとへかし

暁恋の心を　前大僧正慈円

わかこひの涙やそらにたくへらし袖におちくるみねのむら雨

千五百番哥合に　権中納言公経

つくゝと思ひあかしの浦千とり浪のまくらになくゝそきく

定家朝臣

たつねみるつらき心のおくのうみよしほひのかたのいふかひもなし

水無瀬恋十五首哥合に

雅経

たえぬ人のおもひけとあよ清大淀袖にせきやる涙の通路

皇太后宮大夫俊成女

あちらなる時雨を袖に秋かけていひしはかりをまつとせしまに

かよひこしやとの道しはかれゝにあとなき霜のむすほれて

新古今和歌集巻第十五

恋哥五

水無瀬恋十五首歌合に

藤原定家朝臣

白妙の袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風そ吹

藤原家隆朝臣

思ひいる身は深草の秋の露たのめし末やこからしの風

摂政太政大臣

野への露は色もなくてやこほれつる袖よりすくる荻のうは風

題しらす

左近中将公衡

をりわひて野への露とははらはねとわかなけきそとおもひけるかな

右衛門督通具

とへかしな尾花かもとの思草しほるゝ野への露はいかにと

家に恋十首歌よみ侍けるとき

権中納言俊忠

夜のまにはきえぬへけれと露霜のいつまて人をあきとまつらん

題しらす

道信朝臣

あたなりと思ひしかとも君よりは物わすれせぬ袖のうへの露

藤原元真

なつくさはかりそめにとつゆときえなてむすほゝれつゝよそにみえけん

きのあて侍ける女のくちしも也ゝとゝるらんときは
侍られをかのたとこみかへやるとて
和泉式部
今こむといふことのはもかれゆくによな〳〵つゆのなにゝてそくらん
きのあるころとおもふく侍りけるあかつき
わすれてよひて侍りける色とゝふ
有原元輔
あさとあけくつゆの涙おちるをおるゝのよてや人のとふらん
藤原惟成時まつりまいる　よみ人しらす
うらみてやなをおもふ宮城のゝ萩のしたえたよもすから
色こゝ　藤原惟成
萩のはやつゆのまゝにおとろかすわかるゝ心あるよなと
題しらす　花山院御製
まれにたにきくかはりにつけつゝ秋のつゆのむすふれにつ
ひさしくなりぬる人に　光孝天皇御製
えたをわかれしはかなくさるかやうつろふのはなのよるくさえ
御返し　よみ人しらす
つゆおほくおくふ秋のよの花てるはみ川のたえぬをもる花
みちのくにのおもに侍る女九月はかりにやり
つかはしける　源重之

思ひやるよそのむら雲時雨ておもちがいろも紅葉こそすれ

おもふ事侍ける秋の夕くれになかめてよ
み侍ける　　六条右大臣室

なよらくきりかきくらす心をも秋ぞ秋なるよ世のうさ

思ひしるとも　　相模

冬かれのもりのこすゑをみわたせば人の心も秋ぞしらるゝ

いつまでとさだめなき世をいかなるらんいつかのこと人のけふ

隆信公

人しれぬねざめの涙ふりみちてさもしぐれつるよはの空かな

光孝天皇御製

なみだのとこはいつもあまのはらからまさりてうきてぬる

坂上是則

枕のうくと思ひし涙川今はわが身のしづむなりけり

よみ人しらず

なかれてと袖にみるめのさしくるもつらき人のこゝろなりけり

いさ袖かわれしほならねるのひくしきをぞてぬる

わすれのなみの下草みなくれてたゆむこゝろくねこそなかれ

うらみくるいみ人わかなるひかりのつくね風をのぞむ

ひとりねとせよ心のうらみしあらしまさりてよそのけ

こまちるゝ人をあひみしれぬはなをみつて花こそうけ

いのちをハわかものときゝしをつらきかなおもはぬかたにまかるまつ
いつまてかくれなむ世中にわれもこゝろ人もつれなく
今はてにこそわれ人ゝなをおもひつゝよそになき身のかれは
むなしき心をむすひしもえぬかくいてのかたをかよ
山しろのそのむかしよりくれしのみちのゆかりさす世かな
えらわれなきてありしゆくへのとにかくてかはかりのちに
ることにまぬかれぬくすのえみれぬまゝ
雲のゐるをみる山のをちこちにつゐきをかいなきをかへしてはぬる
月かへるをかゝみるゆゝしき山かけのみちにかへるとれまつ
思ひいてゝよもすからの人にあひてなほひとゝもにちをいそのとをけ

人麿

夏のゆくをしかのつのゝつかのまもわすれすおもへいもかこゝろを
夏草の露わけ衣きもせぬになとわか袖のかはくときなき

八代女王

みそきするならのをかはの河風にいのりそわたるしたにたえしと

清原深養父

うらみつゝぬるよの袖のかわかぬは枕のしたにしほやみつらむ

中納言家持につかはしける　山口女王

あしへよりみちくるしほのいやましにおもふかきみかわすれかねつる
きみかよのへにうつりてうきよのかすにあをの世をへむ

題しらす　　赤染衛門

いかにねてみえしなるらんうたゝねの夢よりのちはものをこそおもへ

参議篁

しらまてねぬよの夢をかたるとて物思まさらし有か

伊勢

春のよの夢にあひつとみえつれは思絶にし人そまたるゝ

國明親王

去のよの夢のしるしはつらくともみしはかりにはあはさらめやは

荘子女王

ぬるか夜よくのうきよすかれて昔たくいふしれとえられす

去のよ女のとかみまちてあけぬるにつらしき

待宮紀伊

ゆくへなきおもひつゝ夏みよみはてつる夢にあるらん

題しらす　　寂蓮法師

つきなかくまちぬ夜なかみえし夢よみなみなあくる

家隆朝臣

なきくちそしてよし

あすとさゝとなくやくくるの夢見えぬるかや

題しらす　　基俊

越ちりしあらし秋来ぬのまくらとや夢みつ人のみしところもなし

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成

あらしふくとこねよのまつ夜なかつけ思ひしむもかれて

題しらす　定家朝臣

かきやりしその黒髪のすちことにうちふすほとは面影そたつ

和歌所一心三の人合に遇不逢恋の心を

皇太后宮大夫俊成女

夢かとよ見し面影も契りしも忘れすなからうつゝならねは

恋の哥とて　式子内親王

たれくらしねぬるを歎きてわか玉のをあけつよし

弁

ときはなるこの代松に忘れていと言葉もみえてすてゝる

崇徳院にて哥たてまつりける時恋の哥

皇太后宮大夫俊成

思ひわひ見しおもかけはさてをきて恋せさりけんおりそ恋しき

題しらす　相模

なかれそむうき名にしはしよとむかなもとめぬ袖のふちはあれとも

をとこのひさしくをとつれもわすれてやと

申侍りけれはよめる　馬内侍

はるゝは恋しきまゝにまれそてつてはたえぬ心なり

おもひきる人のよのまつみえていにしへを

てるむ西にわたるをといひて侍りけれは

きえはてしらのゆきころさきにしころみ人をわすれて

年ころ侍りける女の身まかりてのち

まうてつかはして　藤原仲文

花さかぬくらまの山の桜人のいふるをよそにきゝて

久しくおとせぬ人に　大納言経信母

そのつきころはあれくらしてまほしき人のとはぬを

中宮ねにかれてしらてのちいてゆきし

ひとしくおとつれぬとそこゆるくやといひて侍

るはせしよみ　前中納言教国母

あるかなき人のこゝろはてゝくもまよふ袖はぬれ

題しらず　皇嘉門院尾張

なからへは人のつらさのほとそみむひとひゆくゑ

和泉式部

いかにしていかにこのよにありへはかしはしもものを思はさるへき

深養父

うれしくはわするゝこともありなましつらきそなかきかたみなりける

素性法師

逢事のかたみをたにもみてしかな人はたゆともみつゝしのはむ

小野小町

今はとてわか身しくれにふりぬれは人のことのはさへうつろひにけり

能宣朝臣

かつはやくあらはにかきし橘のうへて中とらやこそらむ

参議伊衡

今はとも昔ころは中たる水のなかれゆくよそにこそ見え

伊勢

昔いひし人のこゝろを山のはのいふかしらねまつはいつまてか我

業平朝臣

いてゝいなは心かるしといはれかつらねは我かひらと今はなき人

梅の花の香の袖よとめるよりてわかせし人はなきよりかはらぬ

弁宮女にかはりてつかうまつる

天暦御製

天のはらことにまてぬ松かえよたちつゝなきともなけつゝなか

御返し

斎宮女御

なきくらむ心を見よとみてふる人の袖にやなきぬをやるはかく

題しらす

光孝天皇御製

あはすてはるさふるかわするゝもあれ人をしもこゝろならすあるらめて

その人にまたあるかときまるそて

兵部卿致平親王

おもひやる心もみえすしら雲のよそにしつつもとなるやはせぬ

題しらす

躬恒

雲ゐにや我山ゐのことて何ゆゑのかることゝゑしすへき

弁更衣ひさしくまいらさりけるにたまはせける　延喜御製

雲ゐなるかりたになきてくる秋になとかは人のおとつれもせぬ

斎宮女御にまうのほることひさしくまいら侍らさりけれは　天暦御製

まゆまとて秋はてゝしもや世をまちわひしよはおもひしらるゝ

題しらす　西宮前左大臣

たつねのこゝかはらてとつても雲居にてすむらん

五節のころ内にて見侍ける人にまたの

年つかはしける　藤原惟成

なにしひとこゝろにかけしをるめけんひかけのかけてこひわたるらん

題しらす　藤原元真

よみの道まよふなるらんさりともとかくてあるへき世のはかなさは

斎宮女御まいり侍らんとておほしける事ありて

きこえ　天暦御製

此のゝの人のゆるさはおもひしをとはんしるへはとゝめさりけむ

久しくなりにける人のもとへ　源信明

あかつきのつゆなみけるかみをみしもかへるさのみてこそなれ

題しらず　　　権中納言敦忠

心にもまかせさりける命もてたのめもおかし常ならぬ世を

藤原元真

世のうきも人のつらさもしのふるに恋しきにこそ思ひわひぬれ

しのひてかたらひける女のたやすくあはさりけれは
侍りしを　　　奈源望

かきりなき恋の海や世の中にいとふるしき生つのみなるやま

題しらず　　　藤原惟成

命をはおもふ心をしひてなからへやさる生のうきま

よみ人しらず

いつよりもひたとろえ山も今は白妙の袖みちれよりまさるゝ思
今よるはおりしとともや白妙の袖衣てのかくとすてゝ
玉くしきあけすくれてしまるとをれていかさかぬん
かくまるをたかつるゝそてもとる草ひむ家のことすかれかて
秋のゝみれむ事の風のくるよをまちわはすなつれなきをもて
ちゝかきりみ野ちのゝたれえそ思はひはきるゝつらん
たかりよをへつるはつくるさつるくるゝ見きそのきもいくるれ
走る涙をさくりもとすまみるのみるあはかゝわもとを世を
さてかるゝ八尺なるとみ涙こゝろくみてのくる

おほしのつねみ

新古今和歌集巻第十六

雑歌上

入道前関白太政大臣家に百首歌よませ侍ける時
立春の心を　皇太后宮大夫俊成

年くれし涙のつらゝとけにけりこけの袖にも春やたつらん

土御門内大臣家にて山家残雪といふことをよみ侍ける　藤原有家朝臣

山かけやさらては庭にあともなし春そきにける雪のむらきえ

円融院位さり給て後ふなをかに
ねのひし給けるにまいりてあしたにたてまつりける

一条左大臣

あはれなりむかしの人をおもふにはきのふの野へにみゆきせましや

御返し　円融院御歌

ひきかへて野への気色はみえしかと昔をこふる松はなかりき

月のあかく侍ける夜袖のぬれたりけるを　大僧正行尊

はるくれは袖のこほりもとけにけりもりくる月のやとるはかりに

うくひすを　菅贈太政大臣

谷ふかみ春のひかりのおそけれは雪につゝめるうくひすのこゑ

梅

除夜に冬まといはせる梅の花盛のさやかなてこのゑむを
枇杷左大臣の大臣になりて侍るよろこひ
にとて梅をおりて　　貞信公
おそくとくつゐに咲ぬる梅花たかうへをきしたねならん
延長のころほひ五位蔵人に侍りけるをとくる
遠侍て朱雀院承平八年にかへりて
てあるとしむ月にあるひ侍る日梅花を
おりてよみ侍る　　源公忠朝臣
もゝしきにかはらぬものは梅花おりてかさせる白ひゆゑ
むめのえれをとりたまひて

花山院御製
いろかをは思ひもいれす梅花つねならぬよによそへてそみる
上東門院よりとをむけ給まゐらせよはの
紅梅を人に給て　　大弐三位
むめのえにおもひつけてみる人の色そふかきに思ねるよし
東三条院女院になりける時円融院つね
にかよひ給てまゐらせまし給てゆきいの今ぬ
のとよまりつかはしける　　東三条入道摂政太政大臣
春霞たちよせけるおほつかな山へはひとつあるね
れ西寺　　円融院御製

むらさきの雲にもあらて春霞たなひく山のかひにそありける

柳を　　菅贈太政大臣

みちのへのくち木の柳はるくれはあはれむかしとしのはれそする

題しらす　　深養父

むかしみし春はむかしの春なからわか身ひとつのあらすもあるかな

堀河院におはしましける比閑院左大将の

家のさくらををらせにつかはすとて

円融院御哥

かきこしにみるあた人の家桜花ちるはかりゆきてをらはや

かへし　　左大将朝光

をりにことおもひやすらむ花さくらありしみゆきの春をこひつゝ

高陽院にて花のちるを見てよみ侍ける

肥後

万代をふるにかひある宿なれやみゆきとみえて花そちりける

かへし　　二条関白内大臣

枝ことの末まてにほふ花なれはちるもみゆきとみゆるなるらん

近衛司にて年ひさしくなりて後うへ

のをのこと大内の花見にまかれりける

によめる　　藤原定家朝臣

春をへてみゆきになるゝ花のかけふりゆく身をもあはれとや思ふ

法勝寺のさくらハ御堂のまへにそひえてそゝくる
まさしくそのかみの木なりとて風にたへたれ
さらよしきと侍しハ花のころともにおもひきて
ことさらその比よりつゝへさせし時ある海
みそさん侍られハおかしいのとしくいれみて
まかでしちるまてまちとるてみかひもて
よみ侍ける　藤原雅経
なれてみしふるさとの春のさかりハの花の下陰
建久六年東大寺供養の時無縁る
のやへけくさらならくるとよそて扱をもせん

はへて侍ける　読人しらす
花ゆゑにあまたの年をむかへきぬみよのみよおほ
こゝろのおこりて侍きところ後徳大寺左大臣白
河の花見にまかるよし侍られハまかりてよめる
源師光
いかなる月日の卯月しかならハ花のさかりけふこそハみれ
殷通の北方のもとに前太政大臣の白河
のあれまかりてかへるのひれのつかへける
はらひにつかはして侍ける
和泉式部

たか人のしかるよはあたらおしくみよしのやまのもものこすゑを

題しらす　藤原[illegible]

みても又またも見まくのほしかりし花のさかりはすきやしぬらん

京極前太政大臣家に白河院御幸ありて又の日花の哥たてまつりけるによみ侍ける

堀河左大臣

たいはまうきてかし花もふゝきけふのみゆきにまちつけてさく

後冷泉院御時殿上花見侍りて

花といふ心をよめるとのことしつかうまつりて

大納言忠家

はかなくて花なれてみてもかひなきにちりぬへきをみてもはなれぬ

大納言経信

さしもあはれ人なき雲のうへにあらしのね花しあれ

ふかき花をよめる

大納言忠教

はるかなる雲のうへにて風のまよひをあはらむ

冷泉院殿にて花のちるを御覧して

のちに三条内大臣にたまはせける

冷泉院御哥

おりおりはつねにあるよのもちゐ人のみなきなりまとゐせん

よをのかれて後百首よみ侍りける花の
うたとて　皇太后宮大夫俊成
今はわれよしのゝ山の花をこそやとのものとはみるへかりけれ
入道前関白右大臣家百首哥人々によませ
右大臣に侍りける時百首歌人々によませ侍りけるに
同家百首に
てる月も雲のよそにそゆきめくる花こそこのよのひかりなりける
春のころ大峯にて人につかはしける
前大僧正慈円
尺をえやまとの端にやりしこゝろをこの山のさくらみせまほしきを

題しらす
はるのうちにかそへし花はさもあらはあれ風をすゝめてちるをうらみしありや
西行法師
世中を思へはなへてちる花の我身をさてもいつちかもせむ
東山に花見にまかり侍るとてこれかれさそひ
けるをさしあふことありてとゝまりて申つか
りける　安法々師
身はとめつ心はおくる山さくら風のたよりに思ひおこせよ
題しらす　源俊頼朝臣
桜麻のをふの下風こえ行てこれなりけりな山もとの花

梅の仲殿にみちのくに侍りける時おくる

つかはしける中に　加茂季鷹

春霞のこゆへまの松山を花とやみゆる花のよみ月

おもひやるかすみたえけん海は松のうらまうらのよみ月

題しらす　法印有清

よそにのみたくみよそなる心の花ちるやちるらん

るをけふすむ時　前中納言資良

たてしみわたるまくさにあかぬは夏の花のきるみたる

千五百番歌合に　有家朝臣

春の雨のわかみなとにみえしれは霜よりもさえしきる

宗徳院にて林下に雨といふ事をよみてつかふ

まつりまゐるに　八条前太政大臣

とゝまらぬけふのかけかれても桜さく雨にぬれぬとそ思

同歌院位にあるまへて後京極殿に馬

命婦とよせわし侍るところに山吹

の花を屏風のうへにおりけるにて侍

りれと　実朝朝臣

やへさく冬かかるぬ山すみのゐせ九重ににほふるかな

同歌院御製

そのかみの八重さく山吹のにほひぬ文字をたてて今は

五十首哥奉りし時　前大僧正慈円

そのかみにたえしまえてそれぬる夜田子のもすその

一条院かくれて後卯月一日上東門院太皇太

后宮と申しける時更衣の御さうそくたてまつり

けるとて　法成寺入道前摂政太政大臣

から衣花の袂にぬきかへよわれこそ春の色はたちつれ

返し　上東門院

から衣たちかはりぬる春の夜にいかてか花の色を見るへき

卯月まつりの日まて花ちらて侍りける

年その花を使の少将のかさしにたまふ葉に

かきつけ侍りける　紫式部

神代にはありもやしけん山桜けふのかさしにおれるためしは

いつきのむかしをおもひいてゝ　式子内親王

ほとゝきすそのかみ山の旅枕ほのかたらひし空そわすれぬ

左衛門督通具中将にて侍りける時祭の使

にていてたちける所にまかりて侍るにあふひの

葉のすゑにかきつけ侍りける

よみ人しらす

たちかへるこゝろそ有明の月影はいとゝくもらぬ都なれ

色事　　　　　　　右京大夫家通

いくちよとかきらぬ宿のみよりもれなはなまつとしれの暖

三条院の御時五月五日菖蒲の根を郭公の

かたにつくりて梅の枝にさして人のもとへつかはして

侍りけるに菖蒲を取りてつかはしけれとあきせ

給はさりけれは　　三条院女蔵人左近

梅かえにをりたかへたる人かたはこゝろのあやめしれさくけり

五月いつかしよの人まふきるなるみえけるといふかく

しらるしの蔭原のさまにもそれを何か

てからことゝ人よといひ侍りけれは

小弁

うちなけきをとせぬ人はことくへなきなへぬる卯花

五月雨のそらはれて月あかく侍りけるに

赤染衛門

さみたれの空たにすめる月影に涙の雨ははるゝまもなし

述懐百首の中に五月雨を

皇太后宮大夫俊成

五月雨はまやの軒のあまそゝきあまりなるまてぬるゝ袖哉

題しらす　　花山院御製

ほとゝきすぬるやのそころはわたるく橋のかにわれぬはさつ

後冷泉院にて長月ばかりにいひける時
かねて菊をくばりけるをはかりてこの
花に雪をつゝみて 恵子女王
よそへつゝなれとなるくさぐさにうつろふこの花
月おくれ侍りける人のもとへつかはしける
かはされて雨のふりけるにつかはしける
和泉式部
昔より名にはきこえて月の光を
影しらん 七條院大納言
たなばたはあれど雨ふる秋のよの
寝覚めにさびしうきよに雨ふりけるにつかはしける
中務
袖のうへの露吹く風と秋風に
葉一葉ちるよりも秋来つゝてまかりて侍りける
紀有常朝臣
秋やくる露やまがふと思ふまであるは涙のふるにぞありける
それやこのかはりて侍りける人の年
たなばたにゆくかたのつゐに七月十日の
比月よきを見て人に代はりて
紫式部

めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにしよはの月かな

皇子宮と申ける時御前にて月の題にて
たえ入られつゝまつりまつるを世のかるむきまね
ききなよおもひしらぬきとくきくとれ給て

三条院御製

月かけの山のはわけてかくれなはそむくうき世を我やなかめむ

参議正光おなし月を人に見せて人のもとへ
まつれとまうさせたまへりけれはつかはしける

伊勢大輔

うき雲ハ立かくせともひまもりて空ゆく月のみえもするかな

かへし　参議正光

うき雲にかくれてとこそ思ひしかねたくも月のひまもりにける

題しらす　藤原為時

山のはを出かてにする月まつとねぬよのいたくふけにけるかな

三井寺にまかりて日ころすきてかへらんとしけるに
人々なこりおしみてよみ侍ける

刑部[illegible]

月をとゝめしあとはすきても山の[illegible]
山里にこもりゐて侍ける人のもとにて侍
[illegible]

法師[illegible]

世にふる今いくとせの山のはにいさよひかゝる秋の月

八月十五夜和哥所にておのことも哥つかう
まつりしに　　民部卿範光

和哥の浦に家の風こそなけれとも浪ふく色は月に見えけり

和哥所歌合に湖上月明といふことを

　　宜秋門院丹後

よもすから浦こく舟は跡もなし月そのこれるしかの唐崎

題しらす　　藤原盛方朝臣

山のはに思ひもいらし世中はとてもかくても有明の月

永治元年譲位ちかくなりてよもすから月を

見てよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

わすれしよわするなとたにいひてまし雲ゐの月の心ありせは

崇徳院に百首哥たてまつりて

いかにして袖にひかりのやとるらん雲井の月はへたてこし身を

文治のころほひ百首哥よみ侍りけるに懐旧

哥とてよめる　　左近中将公衡

心にはわするゝ時もなかりけりみよのむかしの雲のうへの月

百首哥たてまつりし秋哥

　　二条院讃岐

むかし見し雲ゐをめくる秋の月今いくとせか袖にやとさむ

月前述懐といへることをよめる

藤原範通朝臣

うき世をそむく人ハ我思ひなたにもみゆる有明の月

いしやまにまうてゝ侍て月をとらへてよみ侍ける

藤原長能

みやこにも人やまつらむいし山のみねにのこれる秋のよの月

題しらす

頼恒

おいらくておもひくるしき月のちかきによひはかつきし月のおもてやまつらよあひつゝひける人この世の月をみるやといへることをよめる

源道済

なからへてハおなしとも人にこねよの月ハなくさみかたき

はるかなるをもてまかりて侍けれハ月のいつるをなかめて

懐寿法師

みやこのいてくるにはなからむれハ我に月のそひてまゐりける

能宣朝臣やまとの国まかりけるときまかる女乃もとより楽もてまゐりておはさかまかるなとよみ侍けれハ　よみ侍ける

きのふ今日まつちの山みてこそよそにしも月も入なむ

ろそ奇をみつゝ時　摂政太政大臣

月見んといひしそれみな人まてよすのやとしく庭の松風

五十首哥たてまつりしに山家月の心を

前大僧正慈円

山里に月はみるやと人はこし風しくれて木のはをもとふ

摂政太政大臣に侍し時月の哥五十首よませ侍しに

有明の月のゆくへをなかめてそ野寺のかねはきくへかりける

同家哥合に山月の心をよめる

藤原業清 良清男

山のはをいてゝも松の木のまより心つくしの有明の月

和哥所哥合に深山暁月といふことを

鴨長明

よもすからひとりみ山のまきのはにくもるもすめる有明の月

熊野にまうて侍し時よそてよみ侍し哥の中に

藤原秀能

おく山のみねのおちつる秋風にさそはるゝ雲の月そのこれる

月とめはやまのはの雲ゐまきてに山かくれをおもひける

山家の心をよみて侍ける

道因法師 右京大夫文隆男

たつねつるみねのあらしの吹なる山のおくらくすめる月かけ

題しらす

花山院御哥

おつての月をひとりなかめてねとみし人ゆくするあられて

伊勢大輔

有明の月はかりこそかよひけれくる人なしの宿の庭にも

和泉式部

とふ人もさせぬやとにて有明の月のくまなく

家もなく月見るところ心ある人々けりし

大納言経信

すむ人もあるかなきかの宿ならし芦まの月のもるにまかせて

秋のくれにやまさとにてよのつれ作りはへりし

小式部のとしの秋九月十日あまり月くまなく侍りし

よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

思ひやれ秋ゆく月をあはれとてこよひの月をなかめえしとは

題しらす 西行法師

月をみて心うかれしいにしへの秋にもさらにめくりあひぬる

来しすみる月こそ袖にやとりけれむかしみし秋を思ひいつれは

月のゑに心をかくるあかしやみをもそてねかふるかな

ともすれはかはるとはせよとふ人もなき秋のよの月

あきもよき我身のうきを思ふにもくもる月みるかな

入道親王覚性

たかめして思ひやるそらもまたみねは月かかりぬ

藤原道経

秋のよの月に心をなくさめてうき世にとしのつもりぬるかな

五十首哥よみ侍しに　前大僧正慈円

秋をへて月をなかむる身となれりいそちのやみをなになけくらん

百首哥よみし時　藤原隆信朝臣

なかめてもむかしの秋をこそおもひいつる山のはの月

題しらす　源光行

心ある人のみ秋の月をみはなにをうき身の思ひ出にせん

千五百番哥合に　二条院讃岐

うみちてる月やわれをとかむらんこれはむかしのけふのあはれか

世をそむきけるもとせをしいまこそ月をみて

よめる　寂超法師

なれみし月なれはこそ山路のともとおもはるれ

山里にて月のよころをたのもしと人とひて侍

よみ侍ける　大江嘉言

あはれなるむかしの月にむかへても月よみる人のなるらむ

なき月のかけはみちなれ山里にも式子内親王

ならひける　惟明親王

思ひ出るをりをとふ人もあれなかりしほとの月

色し　式子内親王

有明のおなしなかめは君もとへ都のほかも秋の山さと

去日九月今は暁月といふを

摂政太政大臣

天のとをゝしあけかたの雲まより神代の月のかけそのこれる

右大将忠経

雲をのこてらすよのそておもふよ来る月よ猶よその山

藤原保季朝臣

いつやらて来るを待し月のやすらひおくる山のはの

月わかまよ宮古紀氏にむかひて侍まつ事

のみちよ心さしふかきしとかいつくのたよりをと

としつね侍しける時西行よ文つく

おもひそちひてすみ侍ける中にそのえ

ましことありてわかれ侍くるにてあしたに

つかはしける　法橋行遍

あくかるゝ人さへ月のかけにむかひてはわれも浮世をそむきけん

みて月をと　寂蓮法師

あらしのふく月よとゝまらぬやとりをやむかしかきと

遍照寺にて月をみて　平忠度

すみきえ者の人をつけてやとりかりのなき池の月

おもひそうて侍まつ人のもとよまかりて

その人ハおもふ事をみていさゝかあはれなる心よしあ
まし入て侍けれハ　前中納言匡房
やへむくらしけれる宿ハ人もなしまはらに月の影そすみける
題しらす　神祇伯顕仲
かもめゐるふちえのうらの奥つすによふねいさよふ月のさやけさ
俊恵法師
難波潟汐ひにあさるあしたつも月かたふけはこゑのうらむる
和哥所会に湖辺月といふことを
前大僧正慈円
わか此浦よ月のてるまのさやかにもなくつるの声すなるけ

宮内卿
さしかくし秋の月まつよにおもはぬとやよのうき人
藤原家隆
明ぬるにあけぬ人の秋なとみすもしる事月も夜かハ
くまのゝよりかへりて侍けるみちにて切目宿にて海
辺眺望といへる心を人々つかうまつる
同し　具親
ゐるあとをたてゝもゝちも月のへたての舟
ハ十よおそくわかれて後みえ我めしみなと
てらされつ　皇太后宮大夫俊成

ためしおきて今やとせよあさけ山の蓬はもとより枯ものゝく
千五百番歌合に
あれまさる秋の庭こそあはれなれましてきえなむ露の夕くれ
題しらす　西行法師
雲かゝる遠山はたの秋されハ思ひやるたにかなしきものを
五十首歌人々によませ侍りける時述懐の心を
よみ侍りける　守覚法親王
ゑせくらしのみさしのかたのやそとせよおもひよそへてなそへて
秋風情ありとしもなき
左衛門督通光
浅茅生や袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢を吹あらしかな
皇太后宮大夫俊成女
ことゝへよみえしゆめのまくらよりやの野への秋風
題しらす　祝部成仲
白露ハ置にけらしな宮城野のもとあらの小萩すゑたわむまて
法性寺入道前関白太政大臣家にて女郎花をよませ侍りけれハ
基俊
女郎花さかりのいろをみるからに露のこゝろのほとそしらるゝ
ぬし
法性寺入道前摂政太政大臣

白露もふかきまかきの菊花ちらぬかきりやいろのまさらん

影しられ　　曾禰好忠

山里にとひくる松垣のひまなくも秋は秋なくつけ

秋のくれにまつのたいぬるとそみえけるてゝ伝

きる　　安法法師

もゝせの秋のあくはてすねいつしあはれの露と消なん

禎保親王のくみのきつとして哥伝まる時

つかうまつりける　　前中納言匡房

秋をつくるみ山のはみきに有明の月そとまれる

九月尽くる日よまかりけるを宗法院にてよめる

よてよめる　　大蔵卿行宗

花すゝき秋のすゑ葉にやとりそめわれはとまらぬなく人のこゝろそ

山里にすみ侍けるころあさなゝゝまかりけれ

たゝ前中納言顕長かもとにつかはしける

後徳大寺左大臣

長月のあら風やつまてさそふらんや秋のなこりは

色し　　前中納言顕長

世中にまよひてわれは知るかたの人はかりのきのまつゝする

清涼殿の庭にうへたちの菊をそ使させ

給てはおりしに　　皇后宮御方

うつろふも心の花の秋なれハ今なをあきくれ人の露
なる月のこゑ野宮とさむきハ人まろく　源順
むかしみしのきやかのす花時雨月あはれなるらん
影しれ　よみ人しれ
山川の水のみなかみにてはらはらくさねの松を
見え舟すみ時　土御門内大臣
秋とふ人ま分かせをさて忘かうへかしこれ
最勝四天王院障子にあふさか白河よみてある
ハ　家隆

まきせにも子を我かハのはまも出雲をよまえうち侍らん
え浦のむらすみきるきのかけのよ清き納
え住きるこゝろ雲いつてのよなてるらんて
の陰もしすをて侍られんとつかりけり　赤染衛門
はれやらぬ雲のうへとハあれなるいつまてのかきね成るを
これなや人たちくるせ行ては雲のあらる　後白河院御弁
露のおきさるよしハ行くえしらぬ白雲ともあまりやハ
雲よりまて述懐の歌ともある

皇太后宮大夫俊成

うき山やこゝろにかゝる雲霞はらひてぬるみねの月をそみる

佛名のあしたにけつりをつかはされたる所へ遣して

朱雀院御製

とりあへて霜よりさきに花なれはこゝろはむかしのことにこそあれ

花山院おほきの絵てかゝれたる佛名に

まうてられけれはよみて侍ける

前大納言公任

かくもちるへきよのふるれはそのまゝ花のちりけり

之し

御形宣旨

尺しゆゑのいたつらによはすとまよはせぬ花の世は

影しまれ

皇太后宮大夫俊成

おいぬるをちかきもおしむとしに路の雪をとゝめんはつ

慈覚法師

おいのみよわる月日をとゝめなはかたみとしの

はなをうらむ

新古今和歌集巻第十七

雑哥中

朱鳥五年九月紀伊国に行幸時　河島皇子

白浪のはま松かえのたむけ草いく世まてにか年のへぬらん

題しらす　式部卿宇合

山しなのいはたのをのゝはゝそはらみつゝや君か山ちこゆらん

在原業平朝臣

あしの屋のなたのしほやきいとまなみつけのをくしもさゝすきにけり

はるゝ夜の星か河への蛍かもわかすむかたのあまのたく火か

読人しらす

さゝなみやひら山風のうみふけはつりするあまの袖かへるみゆ

貫之

ちよふめのえれかすとて[illegible]旅てぬひとゝる

なからの橋をよみ侍ける　忠岑

年ふれはくちこそまされ橋柱むかしなからの名たにかはらて

恵慶法師

まつはみゝのえやはもとそていつれはよくへとせくんね

後徳大寺左大臣

くちにけるなからの橋をきてみれは芦の枯葉に秋風そ吹

権中納言定頼

奥津風よはに吹らし難波潟暁かけて波そよすなる

たるすまのうらにまかりてよめる

藤原孝善

須磨の浦みちくる潮のはやけれはあまの子まおよの舟

天暦御時屏風に

壬生忠見

秋風の関吹こゆるたひことに声うちそふる須磨の浦波

五十首哥よみてたてまつりし

前大僧正慈円

須磨の関夢をとほさぬ波の音をおもひもよらて宿をかりける

和哥所の哥合に関路秋風といふことを

摂政太政大臣

人すまぬ不破の関屋の板ひさしあれにし後はたゝ秋の風

明石浦をよめる

源俊頼朝臣

おほえよりとなけゝとみなえ吹風にはれゆく明石の月をこそ見れ

眺望の心をよめる

寂蓮法師

和哥の浦を松の葉こしになかむれは梢によするあまの釣舟

千五百番哥合に

正三位季能

あはれのえみよの宮ハ神さひてよふけゆく浦の松かせ

海辺のこゝろを

藤原秀能

今さらにすみよしとていつともむかしの松風のたえまの光

影しるき　　　貫之

いくよへし入江の松のむらしくれたつ浪のおとはきこゆらむ

むすひあへまよそてくもりゐまてたえぬと

のこしはみゆきして侍るとて

中務卿親王

おもふその浦まて浪風をさとへ八松のこゝろねたむるとへよりや

大貳三位すみよしにまうてけるときよみて

後冷泉院御製

又人を心よ住吉のまつとのむかしをもはさかむ

御返事　　　大貳三位

住吉のまつはしられて君か年のけふこそ

数もかはらすにとせ侍るに

祝部成仲

すみよしの浪のこゑそてさすか松吹風の秋のくれを

そなれてよりはあきの

越前

なよつとよせむするれや田子の浦みちよのまつにかゝるまさる

海辺ととへるところをよみ侍

藤原家隆

みや河世六番のうちに祝ひみなはせおさそひく塩かまの浦
大神宮にたてまつりける歌の中にかれ
とよめる　皇太后宮大夫俊成
世とてやいゐるつみせん世かやいちでのうみのあまのしわざ
伊勢にまかりける時よめる
西行法師
すゞか山うき世をよそにふり捨ていかになりゆく我身なるらん
題しらず
前大僧正慈円
世の中を心たかくもいとふかなふじのけぶりを身の思ひにて
あづまのかたへしゆぎやうし侍りしにふじの山を
よめる
西行法師
風になびくふじのけぶりの空にきえてゆくへもしらぬ我おもひかな
さつきつごもりにふじの山の雪しろくふれるを
みてよみ侍りける　業平朝臣
時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん
題しらず　在原元方
春秋もしらぬときはの山里はすむ人さへやおもかはりせぬ
五十首の歌よみし時　前大僧正慈円
それならで浮世の外をすてゝすまんのおくもみよしの山
題しらず
西行法師

よしの山やとりしと思ふかたを花ちるらんと人やまつらん

藤原家衡朝臣

いとへても猶いとはしき世なりける野への秋の秋風そ

千五百番歌合に　右衛門督通具

さとすらはちるかはれるはすはまのいはまよるくからん風の音

守覚法親王家五十首よませ侍りけるに　家

秋の歌とてよめる

藤原有家朝臣

わかやとはさよふけて松のをとつれてゆく風ふくらし

吹そへて秋の山の[illegible]風と[illegible]

宜秋門院丹後

山里の峯のよすかもねぬ夜のさひしさはあらし

ふるてらてまたまし

藤原家隆朝臣

鹿のなく松のあらしもちるもみちはわか袖ならん

題しらす　寂蓮法師

ことしまて世すみのうちの山へはおもひの風も心なくて

かはきあるをかすかへよらはまねきてしらむらつ侍らる

法服つゝみてとて

権中納言師氏

たく山のこのはのふかさみよいつきのものとて侍さる

返し

小侍従

白露のおくりゆきてはたく山の木の葉の色は[illegible]

能宣朝臣大原野よりまうでて侍りし山里の
いとおもしろく侍りしにてあかぬかやうなる人
の侍りけれハいつこやすからむとなむいひこと
ひ侍りけれハ　　よみ人しらず

世中をそむきにとてはこしかとも猶うき事ハおほはらの里

かへし　　　　　能宣朝臣

かをとハみれ行かの山と思ひつゝいふきをさそし人のいはまん

あをき山にすみ侍りけるひしりのもとにまかりて
まかりたりけるにいかなるのことにてそ人も
侍らさりけれハかくてまかりてつけける

恵慶法師

こけのいほやさしてすみけれと見侍てかくこゝ山の道の家はけ
るやまのちよみてやし

あれはてゝ風もさはらぬこけのいほに我ハなくとも露ハもりなん

題しらす　　　　西行法師

山ふかくさこそ心ハかよふともすまてあハれをしらむものかハ

やまさとをすまぬ心そいろふかきあはれていつ月もあるなよ

山家にひとりゐてくるゝといへそみえ侍る

寂蓮法師

立出てつま木をりこしかたをかのふかき山路となりにけるかな

住吉歌合に山を　　太上天皇

おく山のおとろかしたもふみわけて道ある世そと人にしらせん

百首歌たてまつりし時　　二条院讃岐

なからへて猶君か代を松山のまつとせしまに年そへにける

山家松といふ事を　　皇太后宮大夫俊成

今はとてつま木こるへき宿の松千代をは君となをいのる哉

春日社歌合に松風といふ事を

有家朝臣

ましちるおまへのまつとはかりし神よゝりこそ庭の松風

山寺に侍りけるころ　　道命法師

世をそむくところとかきくおく山はものおもひにそ入へかりける

小野弁の右大臣よそにてふみをつかはしける

和泉式部

世をそむくかたはいつくにありぬへし大原山はすみよかりきや

返し　　小侍従

おもふ事大原山のすみかまはいとゝなけきの数をこそつめ

題しらす　　西行法師

誰すみてあはれしるらん山里の雨ふりすさむ夕暮の空

しをりせてなを山ふかくわけいらんうき事きかぬところありやと

殷富門院大輔

かしこなるみなとのせけ山まかるとておかれぬる字根高門

法輪寺にまうで侍りけるに人のもとにまうできてくれぬ
ていひつかはし侍りければ　道命法師

いつとなくをぐらの山のかげを見てくれぬと人のいふぞくやしき

後白河院栖霞寺におはしましけるに駒ひき
のひきわけの使にてまいりて

定家朝臣

さがの山ちよのふる道あとゝめてまた露わくるもち月の駒

ふるき事侍りけるに　知足院入道前関白太政大臣

せり河のなかれ久しくすみけるをかしこき跡にあとをたづねて流れぬるよ

そのころ久しく絶えたるれうけるを事侍りたるあ
くらし太政大臣にて参りて奏し侍りける

東三条入道前摂政太政大臣

かくせきもありともおほゐ河のそこぬいろも歌をまつよ

返し　円融院御製

むかしわがせぬ河のせをたえられかなとむかしのみちをとふ歌よみ

題しらす　人麿

ものゝふのやそうぢ河の網代木にいさよふ浪のゆくへしらずも

ねのひすのたまえにまかりて

中納言家持

ゆかしきけにあすとよかひの雨のふりけれはさきん
京極前摂政太政大臣ねのひけるによませまゐら
て侍りける　二条関白内大臣
みわたせは衣ゆきは白雲のかゝまくるねの川の瀬
最勝四天王院の障子にねのひのかきたる
まゐりける　有家朝臣
久方のあまのかはらにやとゝめき雲のよきすみかは川のせ
あまの川原をすくとて　後徳大寺左大臣
むかしきくあまのかはらをたつねきてあとなき水をなかむはかりそ
題しらす　実方朝臣

あまのはらよりすみとなしむかしの桜ははちよやちよや
堀河院御時百首たてまつりけるに　前中納言匡房
海のへにこもりすむらんはるかなるよそめにてもおもひしらせの
天暦御時屏風に国々のところをかゝせ給ひける
縁まゐるとて　中務
ほとゝきすなかなくさとをとおもふとてわすれかたみにやまかはしとひくる　有家
題しらす　前大僧正慈円
山里にひとりなかめて思ふかな世にすむ人の心つよさを
西行法師

山里にうきよいとはん友もかなくやしくすきしむかしかたらん

山里に人こさせしと思はねととはるゝことそうとくなりゆく

前大僧正慈円

草のいほをいとひても又いかゝせむつゆの命のかゝるかきりは

跡をたえて修行し侍りけるに

人のとひ侍れはよみてつかはしける

大僧正行尊

わかなるをハ人のとはさるしるしにて行すむ身をそあはれとはみる

あひしりける人の熊野にまうてけると侍るに

はかりける　安法法師

世をそむく山のみなみの松風にこけのころもや夜さむなるらん

西行法師すゝめて百首よませ侍りける

家隆朝臣

いつまてかこけの袂につゆをおきてすてぬ山路の月をみるへき

五十首歌たてまつりしに山家の心を

式子内親王

今はわれまつのはしらの杉の庵にとつへき物をこけふかき袖

小侍従

しきみつむ山路の露にぬれにけりあかつきおきのすみそめの袖

摂政太政大臣

ひとりの人もとハぬ山路なれと人ことにたつねきたるとき花さかりを
ふるきこと也けり　飛鳥井雅經
かきやりける人の心にけくらひて尊きやはらし花のかみ月
俊恵法師見まゐらせてハ年ころつかうまつりける
難るとかたくのことよりつかはしける
賀茂重保
はやくより人にすくれたる上手の人の歌を撰ひこころさし
また後徳の人にある山寺にまかりてまいりける
寂蓮つねまかりて侍りけるに庵の徒然なりし
ておもひよみて侍りけるを見せてのちにさる
にて侍りける　西行法師
やすらはむ思ふ心のなと侍りけれはすみわたりける世の中を
山家をあらたむるよみ侍りける
前大僧正慈円
山里にとひくる人のことくさハこのすまひこそうらやましけれ
後白河院かくれさせ給ひて後百首歌に
式子内親王
をのゝえのくちし昔ハとほけれとありしにもあらぬ世をもふるかな
述懐の心をよみ侍りける
皇太后宮大夫俊成

いかにせむむかしのまゝのかたの行衛こゝろもしらぬ世中哉
その後むかしをおもひ出て侍て
祝部成仲
時雨ハむかしをのこす此の子孫はまの家に秘めおしくて
題しらす
前大僧正慈円
をちの里のあはれをとふ人ハなし人ハたゝ山おろしの風
西行法師
古畑のそはのたつ木にゐる鳩の友よふ聲のすこき夕暮
山かつのかたをかかけてしむる野のさかひにたてる玉の小柳
しけり野をとへはすみける庵にまかりてむかしを思ひいてゝ
むかし見し庭の小松に年ふりてあらしの音を梢にそきく
三井寺やけて後すみ侍ける房を思ひやりて
てよめる　大僧正行尊
住馴しわか古郷ハこのころや浅茅か原にうつらなくらむ
ふるき家にて侍ける　摂政太政大臣
古郷ハ浅茅か末になりはてゝ月にのこれる人の面かけ
西行法師
たまやかにむかしすみける跡をとへは宿にもりくる月の（ひかり）
人のもとにまかりてこれを松の陰にかきつけ
あらひくるし
貫之

かきくらしてさみたるれはうらひねもす雨ふる松のこゑまれ
西院の后こゝてやうあひたまへるものゝ人をつたへ侍
きゝけるよしまつりけるせうねよしやまれたよ
み侍ける　　道因法師
いそのかみふりにし人をつれなれはあはれなりけるつたへる
ねむころなるを　　道慶法師
いまはとて頭下ろそるあはれなる下のころものゝ袂
守覚法親王五十首歌よませ侍ける時
あはれなるを　　家隆朝臣
宮こは今はとふ人もなきやとの庭の松はてすけ
よのへはやはきゝみちに山人あきらかなるよやきく
ときこえて　　赤染衛門
あまりけむ身は山ふかくすまひせしよの中に何かへるらむ
題しらす　　人麿
秋されは今かはるらむ山さとにおきてしぬかへる思
　　天智天皇御製
あさくらや木のまろとのに我をれはなのりをしつゝ
行はたかこそ

新古今和歌集巻第十八

雑哥下

山　　　　菅贈太政大臣

あしひきのこなたかなたにみちはあれと都へいさといふ人そなき

日

あまのはらあかねさしいつるひかりにはいつれのぬまかさえのこるへき

月

月ことにながるとおもひしますかゝみにしのうらにもとまらさりけり

雲

山わかれとひゆく雲のかへりくるかけみるときはなをたのまれぬ

霧

きりたちててる日のもとはみえすとも身はまとはれしよるへありやと

雪

はなとちるたまとみえつゝあさむけは雪ふるさとそゆめにみえける

松

おいぬとて松はみとりそまさりける我くろかみの雪のさむさに

野

つくしにもむらさきおふる野へはあれとなきなかなしふ人そきこえぬ

道

かるかやのせきもりにのみみえつるは人もゆるさぬみちへなりけり

海

しみちとやへつらみみつまてきまつこれ心を見てつかん

かさしき

ひとりのみ人たえすかゝしきのとやら桜をたえまかさなん

波

あられきとやし流とやまとさと三室かきまくてつこの庭

題不知　読人しらす

さし流の音山をみすまへ浪かまるあまの袖そぬれける

白浪のよするなみまにつくしあまのこゝろ八節をまとはむ

千五百番哥合に　摂政太政大臣

舟のりし流のさすらひはまちわかのさとはおほかたのかや

題しらす　前中納言匡房

さすらふる身はさためなきかすみまて舟の泊にまかせて

常覚入道上人

いにしへもむかしもきゝしみなとのをさかおやいとゆかしん

人麿

あかしのきりく入江のなつのえみしにとみるまやとまなれ

殷富門院

芦きのとせもちひく芦の浦めうすせをとつゝらのなん

浪松とこしへにのよ人伝まる

頌

たけきみすきの松のこゝろをあはれつめりけるをよろつよやはみる

山水をむすひてよみ侍ける

能因法師

あひ念の山の岩井水よみなれはまゆむすふ人はなれはおほゆ

ほとちらねときゝける人に紫束つゝみてそ

法成寺入道前摂政太政大臣

ちれはこそ花のをしさもしらるれのちのよのなをもしらへつる

后よりら給もろともに冷泉院のきさいの宮の

れこひさいつきよてたてまつらせ給へるきつるをむかしの時

人しまゐらて　東三条院

そのかみのたのみしことをまつ人ハ今ハあひのつらきをきしのかむ

返し　冷泉院太皇太后宮

つきもせぬひかりのみやになれきれてたてし人まてるへのつれなき

上東門院むかしの後このみの装束をてさる流乃

珠こさうの箱によせて梅のえたにつけてた

てまつれける　枇杷皇太后宮

かけまくもおほの女をさそひやるこゝろやすさの玉よまつハ今

返し　上東門院

よそにしもおもひのたまにみられてたゆるみわれさぬねんちこそすれ

題しらす　　和泉式部

とかくのかなしきおもふくつやれは今はわかれのそらになるし

屏風の絵に塩竈のうらまて侍るを

一条院皇后宮

いつへのわかやまきとこふねとらしもみてぬ塩竈の浦

かく侍る文按察のゆかりの御子て明しおほつかなく侍るを
うときまて絵にてはなかりける

天暦御製

みやこより雲のやへたつおく山のよかはの水はすみよかるらむ

返し　　如覚

もゝしきのうちのみつねにこひしくて雲のやへたつ山はすみうき

よをそむきて小野といふ所に侍りける比業平朝臣の
雪のいとたかうふりつもりたるをかきわけて
まうてきて夢かとも思ひきやとよみ侍りけるに
よみ侍りけるに　　惟喬親王

夢かとも思ハなにかうき世をハそむかさりけむほとそくやしき

みやこのうちにすみ侍りける比ひさしくとふらひおとつれ
まうてにつかはしける　　女御徽子女王

雲ゐとよそのなちかけをおもひきやすむはしまてのやまおき

亭子院おなしよにかくれさせ給ひて秋よみける

俳諧

白河八宮にてかれもまた寺のゆつろ子秋は紅葉なるけ

袖にとられ侍りてよみ侍りける

藤原清正

天津風ふけゐの浦にゐるたつのなとか雲ゐにかへらさるへき

二条女院弁樹院にありしよりてはのまひく

そとおもひそて大納言經信まいりて侍りける人の

日暮のやつらまつよみ人しらと

なけのあはれ雲ゐをまつのすゑやあらむと思て見しをねまし

最勝四天王院の障子によみかよとてきる

不知　宮内卿

わかの浦に鳴なとみるあまたにさそて入道前

寂蓮法師千載集かはさてかまへてまゐりて

みえすすみをとすれてなゐめつとしすれとも

まゐらせさることのなさけとつけて侍りける

れをし　後白河院御製

え涯千尋のまことのつまるかひあるをあはさるやは

土御門院高陽院にありしとりけるに行幸

侍て世きまでよる晩をれ殺してこ

後朱雀院御製

瀧津せは人のいへをみることハむかしよりかたくなん

権中納言通俊後拾遺えらひ侍ける比まつかたはし
もゆかしくなと申て侍けれハ申あはせてこそとて
またきよかきもせぬ本をつかはして侍けるを見
てつかはしける　　周防内侍

浅からぬ心そみゆるおとは川せき入し水のなかれならねと

許されてやかれとおほせられけれハ忠家かもとに
まかりあひてよろつかたらひてまかりたるにつけ
侍ける　　三条基兄

ことのはゝはるかくめれハむかしの今にあらためつるかな

遊女の心をよみ侍ける　　藤原為忠朝臣

むかしあひしあたまくらにたえし人はゝぬるゝなみ
大江峯関けせて夜ともゆきかれて草まくらき
庭にたちてなかしまへるを見侍て　　赤染衛門

草まくらしほる袖のしめきまて人を波の露こそおく
秋比わつらひまうてこもりてとふらひまうて
人につかはしける　　伊勢大輔

しかすかに八千年すこしの千とせよりそ秋のなかれ
ぬへし　　大納言経信

秋風のふきとさすかとハしら竹の竹の葉の末のよわりしやハ
あるところにかよひ侍けるを朝忠大将人か
りて来ひとよしのくるしくて又の
日　右大将保時
言の葉ハなかなるをきゝてまさハねもみるおもかはり行
返し　左大将朝忠
清らなるとてねさるをも言の葉身ひとつませともなんかへしてや
いつハりを人のかくや侍らむ　こゝろみよし　次
たゝくいも言ハ世ハねかなの身のさすかにませんことゝところ之へ
かへし　小馬命婦
雨のみきさへにたえさてぬるをくれなゐ年の[illegible]まよ
題しらす　和泉式部
命さへあらハ人つ会すまのあるときのむ人のすきる世す
倒なれねこと侍るをきれにもなるやうのさて
ひとまつてまて侍なれは
大僧正行尊
たくめつらしくなるとかすれハわか身も世に入やくすれ
五十を打ちまへて時　前大僧正慈円
世中のうれ行末よあさつゆのわか身ハとまるとすれかるす

例ならぬこと侍りけるにて頭おろしてよみ侍ける

題しらす　大僧正明尊

おほへしわたの世のとをしともいれはとしかゝるへしかゝるへき

清原元輔

うしといひてよをひたふるにそむかねは世にわ方とやなりなむ

読人不知

すむきをしかのこゑたかれはいつまてか古郷にありなむ

延喜の時女蔵人内匠白馬節会見けるに

車よりくれなゐのえをいたしたりけるを検非違

使のとかめむとしけれはいひつかはしける

女蔵人内匠

大空にてる日の色をいさめてもあめのしたにはたれかすむへき

かくといひけれはゆるしてけるとそ

まいりてうつまけれはよはりて侍るに心ほそく

おほえけれは　周防内侍

かくてつゝ夕の雲となりもせはあはれかけてもたれかしのはむ

題しらす　前大僧正慈円

世をねとせるまてもしくといふ人のおもふまてやまされるらん

西行法師

つとめて[illegible]心の[illegible]

たのむらんの[illegible]

年月を[illegible]

しきしまの[illegible]

守覚法親王五十首歌よませ侍ける

寂蓮法師

[illegible]

述懐の心をよめる

身のうさを[illegible]

前大僧正慈円

何事を[illegible]

[illegible]

[illegible]

和歌所にて述懐の心を

[illegible]

右衛門督通具

袖に[illegible]

[illegible]

[illegible]

家隆朝臣

大かたの秋のねさめのつゆけくと定めいのちなりとせよとて
かへのつゆや思ひハしらおもひまかはれおほかりのひとよせよ
なの山と松の月も秋風にたなひく袖にかこたれけり
雅経
定めなき世にまくらかはし道ハおもひとかたちのすまひの内
皇太后宮大夫俊成女
おしとき波に月も心つくるれねたる袖に秋をとゝみそて
千五百番歌合に　[illegible]
うきしつみこしよハされはいひとも心にまとひてかくへねねる
題しらす

遁るゝ心のそてをしもねかふてこれねよそにいとはす
たくひなきとよふへきましてとかくとすきまやるまし
五十そ有よみ侍けるに述懐の心を
守覚法親王
あらくそにたすむかひある命ならは命ならは
世をいとふ心のたくひあるなれはおもひしよりも世はなれにけり
権中納言兼宗
述懐の心をよみ侍ける　左近中将公衡
まてやねつらつきまわれとよそ心に述ことやそて
題しらす　読人しらす

こまつるわれはあるせきれての夜をとつてよきやうかれ

源師光

うきつゝもわすれはてゝいのち後のよとてしれさるへきこれは

賀茂季保

きらをもすゝの心の程をとをみえしらぬ世をまよふまし

荒木田成長

はくとみへやとすはあさなとふとなけくはかなふなる

入道前関白家百首歌よませ侍りけるに

刑部卿頼輔

河舟のさしてのほるもよははるてゝくるしさそのまゝとまるよ

題しらす　大僧都覚弁

たゝくの月かいとへやま川にてぬれぬわかそて神なれ

よみて侍るその年源家もとまふ

みせむとつかはしけるによみて侍る

藤原経継

かけるまてとなへてむつかしのころなくて山川の水

かのこゝろみかなひ侍りて秋のよるひとそてそ

こよひのみて侍るとおもひそてなある

鴨長明

見れはまつはて次のこゝろいまをそてみけえるれきし

影〳〵と　源季景

おほかたハあはれなるいにしへとそのこるなれハそれとさへのやすらし

西行法師

いつくにもすまれすハたゝすまてあらん柴の庵のしはしなる世に

月のゆく山に心をおくり入てやみなるのちの身をいかにせん

五十首歌中に　前大僧正慈円

おもふことなとゝふ人のなかるらんあふけハ空に月そさやけき

いかにして今まて世にハ有あけのつきせぬものをいとふ心ハ

西行法師山里にまかりたりけるにいそきもましく

侍けるの月日よあかゝりて侍あとにしらてかへりける夜

うき世いてし月日のかけのめくりきてかはらぬ道をまたてらすらん　葉

前大僧正全真西国のかたに侍ける時法々

りけるに　覚仁法親王

全れをかるそらの子にふくハつくるのをまたくみてやる

前大僧正慈円ふみにておもふことなと申

はくゝりきみゝつくりて侍けるをもとに

前右大将頼朝

みちのくのいはてしのふはえそしらぬかきつくしてよつほのいしふみ

世のなかにはねたる比　大江為

はれて八くまなりけれはよはの月のえよふかくとすらん

題しらす　清慎公

道芝の露にあらそふわか身こそいつれかまつはきえんとすらん

皇嘉門院

あはれとや人におもはるゝ身よりおもはれよかしたゝわかみのほと

権中納言資実

むしろさきるゝ夜はまてつれなさむしろくのるきさる此所

松の木のやきてふるをとへて

性空上人

たゝせある松にくゆる世の中にいまをまてそよそへなる

題しらす　俊頼朝臣

かなしみてよそとみのえあはてふたりいつまてひとるかな

皇太后宮大夫俊成

うきなからひさしくそ世をすきにけるあはれやかけよ住よしの松

春日社の哥合に松風といふ事を

家隆朝臣

春日山たにの埋木くちぬとも君につけこせみねの松風

宜秋門院丹後

なにとなくきけはなみたそこほれぬるこけのたもとにかよふ松風

[illegible]によりてつかさとゝまりて侍りて

菅原孝標女

これ人のうしまけそねたみのあるかゆるのかみをいはまん

臨時の祭の舞人にてもろともに侍りけるを

それも同し人にてのち祭の日つかはしける

実方朝臣

たちかへりての山井の水にかけみれはいとゝ我身のみえまさりけり

返し 道信朝臣

いにしへの山井の衣なかりせはわすらるゝ身となりやしなまし

後冷泉院の御時大嘗会にいけのくみを

して実基朝臣のもとにつかはすとて左衛門の

れとも中くひとりゆくてもいひつかはしける

頼ゝ兵衛に

さかりきてとひみせよときこえおほわれむしのこゑつゝみし

秋来やと誰とふ題をなとか人にとはせむ

まてれとのこまよまきる朝ほとのこゝろ覚え

して 天暦御製

秋のよのあかつきかたの人つてにきゝてきよしみを

秋雨を 中務卿具平親王

うちつけにとはぬそつらき竹の葉のこゑのゆかしき

題しらす 小野小町

こからしの風にもみちて人しれすうきことのはのつもるころ哉

述懐のこゝろの哥よみ侍りける時もみちを

皇太后宮大夫俊成

あらし吹みねの紅葉の日にそへてもろくなりゆく我涙哉

題しらす

崇徳院御哥

うたゝねハ荻吹風におとろけと長き夢路そさむる時なき

宮内卿

竹の葉に風吹よハる夕暮のものゝあはれハ秋としもなし

和泉式部

夕暮ハ雲のけしきをみるからになかめしと思ふ心こそつけ

たれぬめかいくよかへてもわれ人生のつねのつくとて

西行法師

まよひつる人生のつねのやみとすゝむ時しもやわかきたえん

歎の心をよめる

皇太后宮大夫俊成

あはれなる山のはをハそてにきく世のうき雲のはれぬ月哉

百首の哥に

式子内親王

歎のゆふつくるよりわすれるゝうきよの中をとなりしてかく

尼よするしと花まひちもるそ人のとかめ侍れ

と

和泉式部

見し人ハおもひいてらるゝ人ハこれやあはれ海きるおもひこそ見え

題しらす

たらちねのいさめしものをつれつれとなかむるをたにとふ人もなし

熊野にまうてゝ大峯へいらんとてとしころやし
なひたてゝ侍けるめのとのもとへつかはしける

大僧正行尊

あはれとてはくゝみたてしいにしへはよをそむけともおもはさりけん

百首哥奉りし時　土御門内大臣

くらゐ山あとをたつねてのほれともこをおもふ道にまよひぬる

百首の哥よみ侍りし懐旧哥　皇太后宮大夫俊成

むかしたにむかしとおもひしたらちねのなをこひしきそはかなかりける

述懐のこゝろをよみ侍りし

俊頼朝臣

さゝかにのいとかゝる身のほとを思へは夢の心ちこそすれ

ゆふされによくものいとこえられきをまくらをつねなら
をわかれとみて　僧正遍昭

はかなくて世にすくしたりとや花前をとくよりなん

題しらす　西宮前左大臣

ひかりまつえたにかゝれる露の命消はてねとや花のつれなき

野わきたちたるあしたにおきまさる人をとはさ

題しらす　　　　　　赤染衛門

あらく吹風はいかにと宮城のゝ小萩か上を人のとへかし

和泉式部道貞にわすられて後ほとなく敦
道親王かよふときゝてつかはしける

うつろはてしはし信太のもりをみよかへりもそする葛のうら風

返し　　　　　　和泉式部

秋風はすこく吹ともくすのはのうらみかほにはみえしとそ思ふ

病かきりにおほえ侍りける時定家朝臣中将
転任のことゝて民部卿範光かもとへつかはし
ける　　　　　　皇太后宮大夫俊成

小篠原風まつ露の消やらすこの一ふしを思をくかな

題不知　　　　　　前大僧正慈円

世中を今はのかれてすみぬれはいとゝ恋しけ

世をいとふ心のふかくなるまゝに過る月日をうちかそへつゝ

一すちに思ひとりにし心にはなほそむかるゝ身をいかにせん

ありはてぬこの世をよくいとふとも今はやすくそむかん

おもひ入はなの世かはるまゝにそれはこの世のはてまて

西行法師

世をいとふ名をたにもさはとゝめをきてかすならぬ身の思ひ出にせん

身のうさを思ひしらてややみなましそむくならひのなき世なりせは

いにしへは世にあらんやかなるを捨てあらぬのみやとさすらはせん

かなしきかな心のおもむくれかさらめども文にみえ侍りける

入道前関白太政大臣

むかしのみちありしときは世をのがれみな三の子中にてね給る

かなしくと侍るところ大家にこもりて同行

ともなひて京へのぼりねなるとにてよみ侍りける

大僧正行尊

世をそむきて我身にあふなる事となしめ給ひける世に

題しらず

かなしきものをわが身ひとつにおもひつゝそれもあはれと世をそむきけん

あるときすまひ時　前大僧正慈円

いまは世に人山のおくにすまひともあはれとおもふ人はいかにも

題しらず　俊頼朝臣

うき身には山田にみえてすみよかる庵のすまひに振隠やつ

ところ隠遁の心おもひまゐらせ捨てまゐらせ侍る

てすさまじくたゆるところなくてありやすく

おもひすましまゐらする隠居をつけ侍らる

山田法師

三つのをのあきらかなるにまかせてもよからぬのをこや

題しらず　素覚法師

捨てぬ方ハなけれはのかれてそつらきやまつハよそにこそ見ん

法橋行遍

世のなかをあそて今ゆく末をおもふにも人やむかしの月日をそへけるらん

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

源師光

なくへてはまつさしまりとしかくしけむの方のたとそよまよひて

題しらす　八条院高倉

うき世出る日よふかく人をいつハ月のころ〳〵をとむ

西行法師

なさけありし昔のみ猶しのはれてなからへまうき世にもふるかな

藤原清輔朝臣

なからへハ又この比やしのはれむうしと見し世そ今ハ恋しき

寂蓮人々すゝめて百首よませ侍りけるにいなひて熊野にまうてける道にて夢に何事もをとろへゆけとこの道こそ世のすゑにかはらぬ物なれ猶この哥よむへきよし別当湛快三位俊成に申と見侍りておとろきなからこの哥をいそきよみいたしてつかはしける奥にかきつけ侍りける

西行法師

すゑの世もこのなさけのみかはらすと見し夢なくハよそにきかまし

千載集えらひ侍ける時ふるき人〳〵の歌を
見て　皇太后宮大夫俊成
行末ハ我をもしのふ人やあらん昔を思ふ心ならひに
崇徳院にて百首歌[illegible]ける時花歌
[illegible]白雲
[illegible]　式子内親王
[illegible]
[illegible]
花山院御歌
[illegible]

題しらす　中務卿具平親王
[illegible]
蝉丸
秋風になひく浅ちの末ことにをく白露のあはれ世の中
よの中ハとてもかくてもおなしことみやもわらやもはてしなけれハ

新古今和歌集巻第十九

神祇哥

ちはやふるかみのひのさむきに松おひんまてさらゆくとは

此哥ハ日吉社司社のうしろの山にまかりこもりて
して侍ける夜人のゆめにみえけるとなむ

なさけなくおる人つらしわか宿のあるしわすれぬ梅のたちえを

この哥ハ建久二年のはるのころ筑紫へまかれ
りけるものゝ安楽寺の梅をおりて侍ける
夜のゆめにみえけるとなむ

ぬかつくのみこそのたなにたつくそ今そさこえん山の紅葉を

此哥ハ無窮るの両国玄つゝこもり侍けるときまて
ゆめのうちの明神よみ給けるとなむ

よやさむき衣やうすきかたそきのゆきあひのまよりしもやおくらむ

住吉御哥となむ

いかはかり年ハへねとも住の江の松そふたゝひおひかはりぬる

この哥ハ或人住吉にまうてゝ人ゝとかはりよ
ことすみのえの松をとひおひかはりてよみえ
あるてよみわつれ忘まとなむいへる
むかしかは八しあはせの名のこりけるになにてこころにみせて
住吉明神に住吉にて神のやしろの時れ神三まて

ゐてとこそきこゆれ
人これをきゝやくして千里抜群なりとてこそあれ
この舞ハ侍従殿の堀河大納言のつたへられし無節へ
やうて侍まうしまさりへまいるへきよしの夜なとに
おほきなるはしのひらきにまちてむかし言てまかるよしまう
そをくみて侍まうし院室にやうひまうとそむ
臣と申わひとそろへ色されよ世にまゐらせ我を思はれ
此舞ハ陰奥にすゝまう人の無節ハ三年やう
てんと訳ろとそてまうして侍まうかいらしく
くそちなとなれハ宰相てゐるといひてせしとうけ
さそれ笛にもまうよみ夜に見え侍まうとそむ
おほよそ力にあはうあそてたちゝの台にいとむを謂ふ候ん
この舞の台のあらぬとあはそてあやしのん
ゆようらむとたおんにもまう人無節の舞笛を鳴
して侍まうしゆあに足てまうとそ
これのみて人いひつてはうそれハものうそにけてのかふくそ
胡笳の笛ともし
此人も聞こえしのみの天にふうそくのみと知れ
この人胡笳にまさてうる人の夜にそてまうとこ
あときまつてきつてみたるといひけるよ人の心をもれなむかれそや

石清水の社と云は
みなかみ清き流の人にしてあふぎまつれるそのかみの社
この宮ハ稱德天皇の御時和氣清丸をうさの宮
にまうで侍りしときに託宣ありしによりひらけたり
延喜六年日本紀竟宴に神日本磐余彦天皇
大江千古
古ゝ流るゝ淵もとひめのうしとはなるすゑはおほよとにわかるらん
猿田彦　紀淑望
久かたのあめのやへ雲おしわけてくだりし君を我ぞむかへし
玉依姫　三統理平
とびかけるあまのいはふねたづねてぞ秋津しまには宮はじめける
賀茂社の午日うたひ侍るなる歌
やまとかもうみにあらしのにしふかばいづれのうらにみふねつながん
神樂をよみ侍りける　貫之
をく霜に色もかはらぬさか木葉のかをやは人のとめてきつらん
臨時のまつりをよめる
宮人のすれるころものゆふだすきかけて心をたれによすらん
大將に侍りける時勅使にて大神宮にまうで
てよみ侍りける　攝政太政大臣
神風やみもすそ河のそのかみにちぎりしことのすゑをたがふな

おなし時外宮にてよみ侍ける

藤原定家朝臣

契ありてけふ宮河のゆふかつらなかき世まてもかけてたのまむ

公継卿勅使にて太神宮へまうてゝかへりのほり侍けるに斎宮の女房の中より申をくりける

読人しらす

うれしさもあはれもいかにこたへましふるさと人にとはれはかは

かへし

春宮権大夫公継

神風やいすゝ河波かすしらすすむへきみよに又かへりこむ

太神宮の哥の中に

太上天皇

なかめはや神路の山に雲きえてゆふへの空をいてむ月影

神風やとよみてくらになひくしてかけてあふくといふもかしこし

西行法師

宮はしらしたついはねにしきたてゝつゆもくもらぬ日のみかけかな

神路山月さやかなるちかひありてあめのしたをはてらすなりけり

伊勢の月よみの社にまいりて月をみて

よめる

さやかなるわしのたかねの雲ゐよりかけやはらくる月よみのもり

神祇哥とてよみ侍ける　前大僧正慈円

やはらくるひかりにあまるかけなれやいすゝかはらの秋のよの月

いせへ勅使にてくたり侍りけるにいちしのむまやにて
よみ侍りける　中院入道右大臣

君か代もわか代もつきしみもすそ川のせゝのしら浪

入道前関白太政大臣家百首よみ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

神かせやいすゝの河の宮はしらいく千代すめとたてそめけん

俊恵法師

神かせやたまくしのはをとりかさし内外の宮に君をこそいのれ

五十首哥よみ侍りける時　越後

神風や山田のはらの榊葉に心のしめをかけぬ日そなき

社頭納涼といふことを　大中臣明親

いすゝ川そらやまたきに秋のこゑ立てる岩ねの松の下かせ

香椎宮のすきをよみ侍りける　読人しらす

千早振かしいのみやのあや杉は神のみそきにたてるなりけり

八幡宮の権官にてとしひさしかりけることをうらみて御神楽の夜まいりてさかきにむすひつけ
侍りける　法印成清

さかき葉にそのいふかひはなけれとも神に心をかけぬまそなき

賀茂にまいりて　周防内侍

年をへてしけみそのゝみちしはのかりそめならすなりにけるかな

文治六年女御入内の屏風に臨時の祭かけるところ
をよみ侍ける　皇太后宮大夫俊成

月さゆるみたらし川にかけみえてこほりにすれる山あゐの袖

社頭の雪といふ心をよみ侍ける　梅宮使正通

ゆふしてのせにみたらしをとさして後白ぬる雪そ積れる

大そ年今の中に神祇をよめる　前大僧正慈円

君をいのる心の色を人とはゝたゝすのみやのあけの玉垣

尽おれはまちてれの月そみくる塞そとけく
神かくめる　賀茂重保

あふきみて神よのことゝいのりしにおもひしきまてさへてさはく

社司とも貴布祢にまいりて和歌よみ侍ける
つかうまつりける　賀茂幸平

たのみこしのゝみかせをみてみせよせむにおもせ河上の秋

鴨社の哥合とて人々よみ侍けるに月を　鴨長明

いしかはやせみのを河のきよけれは月もなかれをたつねてそすむ

弁に侍ける時五月の祭にまいりて　周防内侍

ふつりける

中納言資仲

万代をいのるかひあるやまつすむ春日の山の松のみとりに

文治六年女御入内屏風に春日祭を

入道前関白太政大臣

はかる神のやしろもしるしとてよゝにつかへむ門をも

家に百首奉侍ける時神祇のこゝろを

あめのした人つかさの山のけるそてそのむかしよりことはつてや

皇太后宮大夫俊成

かすかのゝなかとみのしるしたえせしてそ神さためおかむ世を

大原野祭にまいりて周防内侍につかはしける

藤原伊家

千代まても心して吹もみちはを神もをしほの山おろしの風

最勝四天王院障子に小塩の山かけるところ

前大僧正慈円

をしほ山神のしるしをてらすやのみとり八千代もかはらぬもみち

日吉社によみてたてまつりける中に二首を

やはらくるひかりあまねきみつのやとにひろきめくみをたのむすゑかな

述懐の心を

わかのむらのやまのゆてさすみけれともとの道よ人まれ

打かへてひとつのけふぬとも波あらしきまきのしけさる

もろ人のねかひをみつのはま風に心すゝしきしての音かな

小野にて詠てたてまつりける

さめぬれハ思ひあはせてねをそなく心つくしのいにしへの夢

熊野へまうて給けるとき みちにて花のさかり
なりけるを御覧して

白河院御製

さきにほふ花のけしきをみるからに神の心そそらにしらるゝ

熊野にまいりてたてまつり侍し

太上天皇

岩にむすこけふみならすみくまのの山のかひある行末もかな

新宮にまうつるとて熊野河にて

くまの河くたるはやせのみなれさほさすかみなれぬ浪の通ひち

白河院熊野にまうて給ひておほんとも
の人々塩屋の王子にて哥よみ侍けるに

徳大寺左大臣

立のほるしほやのけふり浦風になひくを神の心とそみれ

熊野へまうてゝ侍しに石代の王子にて人々の哥
かきつけさせて侍しに拝殿のなけしに書
つけて侍し哥

よみ人しらす

いはしろの神ハしるらんしるへせよたのむうき世の夢の行末

延喜十六年やまて年のかゝに遷宮侍りけるに
まいりて　太上天皇
[illegible]
加賀のかみにて侍ける時白山に詣やまうてと
ありひとて日本紀の竟宴の歌よみて侍りける
民部大輔
ゆふたすきてのしらやまのかみをもおもひしられよ
一条摂政内蔵頭に侍ける時人々に
侍りけるによめる　藤原道信
住吉の岸のまつにかゝるしら波のよるすみけれとまうてする
或所の屏風の絵に十一月神まつる家のまへ
に馬にのりて人のゆくところあるを
能宣
さかきはの霜うちはらひかれすのみすめとそいのる神のみまへに
延喜の御時屏風に夏神楽の心をよみ侍ける
貫之
河やしろしのにおりはへほすころもいかにほせはかなぬかひさらむ

新古今和歌集巻第廿

釈教歌

なほたのめしめちかはらのさせもくさわか世の中にあらんかきりは

なにかおもふなにをかなけく世の中はたゝあさかほの花のうへの露

この歌二首は清水の観音の御歌となんいひつたへたる

智縁上人伯耆の大山にまうてゝいてなむとしけるあか月ゆめにみえける歌

山ふかく年ふる我もあるものをいつちか月のいてゝゆくらん

ちよ八のみつてこそわしの峯のちくくまて

行基菩薩

あらくきくせの法のいつかそてうき世のなかよひわたらん

比叡山の中堂建立の時

伝教大師

あのくたらさんみやくさんほたい仏たちわかたつ杣に冥加あらせ給へ

入唐の時歌

智證大師

のりの舟さしてゆく身そもろもろの神も仏もわれをみそなへ

菩提寺の講堂の柱に虫のくひたりける歌

しるへある時にたにゆけ極楽のみちにまとへるよの中の人

御さけの堂乃岩屋にこもりてよめる

日蔵上人

寂莫のこけのいはとのしつけきになみたの雨のふらぬ日そなき

除睡正念しむといふことをよみ侍る　法円上人

よもすから仏のみちにかゝる身の末はるかなるこそたのもしけれ

題しらす　僧都源信

われたにもまつ極楽にむまれなはしるもしらぬもみなむかへてん

天王寺の亀井の水を御覧して　上東門院

にこりなきかめ井の水をむすひあけて心のちりをすゝきつる哉

法華経廿八品の哥人くによませ侍ける

提婆品の心を　法性寺入道前摂政太政大臣

わたつみのそこよりきつるほともなくこの身なからに身をそきはむる

勧持品の心を　大納言経信

かすならぬ命はなにかおしからむのりとくほとをしのふはかりそ

五月ころ雲林院の菩提講に詣てよみ侍る　肥後

むらさきの雲のはやしをみわたせはのりにあふちの花咲にけり

述懐歌よみ侍るとてゆめにちるといふよ池の

こゝろもとそねかふ花にちらはちれ

よみ人しらすきて人の見しを侍られける夜の

しらま人をとおそれしきうた
たな川のなかれきよくすみわたれはくもる月の影もうつらぬ
述懐の哥中に　前大僧正慈円
ねかはくはしはしやみちにやすらひてかゝけやせまし法のともし火
とく人のゆききのつゆわかるゝはなきてつまそて消ん事なき　すてふ
たくへきくまんゆめのうへのひとつのあゆみまゐりしとかれ
観心如月輪若在軽霧中のこゝろを
権僧正公胤
わか心なほはれやらぬ秋霧にほのかにみゆる有明の月
家にて哥よみ侍りけるとき十界のこゝろを
よみ侍りけるに縁覚のこゝろを
摂政太政大臣
おく山にひとりうき世はさとりにきつねなき色を風になかめて
心経のこゝろをよめる　小侍従
色にのみそめし心のくやしきをむなしとゝける法のうれしさ
摂政太政大臣家にて十楽のこゝろを読
侍りけるに聖衆来迎楽
寂蓮法師
むらさきの雲路にさそふ琴のねにうき世をはらふ峯の松風
新古今和歌集

きみやこのうきよのみちにみえすかん花のかほりのゆかしのこゑ
枝葉不返本
ちる秋もかへらぬ花よ木の葉の露ハもとくれなゐの色やハある
川橋流路来
ちる水のくるしき御ちかひあみもさすけふるふ心なるらめ
法界躰性ハ不可思議もうしす停不の道
一念法の空と　前大僧正慈鎮
いつもなやみのまよへぬのかやかるを元吹風よ人とふてぬ
化城喩品化作大城郭
なかよしきせのみちをむすびてやすらひたくすよもやハ宿なし
今劫法界或住不退地
やまかけの道のふるさとをゆぬやすらひ人ぞ見る
普門品心念不空過
おもへてむきこそやすらひと思ひしにまかせぬ人は心きえて旅を
氷満豈不満とふむそるを　家隆卿作
おもへてはまかすこころみにひらきし萩のいろのまかハ
元照るる山
ねむさめのつきハめくるゝ海はるすみけ谷みれけくは
あまよるもすよみ侍るとききは谷のさとみるを

此訣要旨

入道前太政大臣

うきよく心のみちをしらすはいかてまことのくらゐにかなはん

勧持品　　正三位頼政

さりともといくよまてわれはいのちやさらに人は命とおもへ

法師不加刀杖念仏故慈悲のこゝろを

寂蓮法師

あはれなりあまよろこひをせめぬかは世をわすれの世をかな

五百弟子品内秘菩薩行しんを

前大僧正慈円

いそへのまつとなく野への口すさみ心の月はくもりもやらむ

人ことにめてゝ法文百首よみ侍りけるに二首

但空者如夢幻　　寂然法師

道の人のかゝるハひとをさそひてかへるまよひをいつやこの声

并清涼月　懸於畢竟空

雲はれてむなしきそらにすみなからうき世の中をめくる月かな

栴檀香風　悦可衆心

吹風に花橘やかほるらむむかしおほゆるけふの庭かな

作是教已　復至他国

やすらひのうちによそへてかへるなるのりのをしへのおもきけ

此日已過命即衰減

はかなき命をすてゝとおもへとも入ぬるのちのこゑそかなしき

悲鳴嗚咽　痛恋本師　　素覚法師

なよたけのよゝのふることきゝてしもはせるとさるらん

弃恩入無為　　寂然法師

そむかすはいつれのよにかめくりあひておもひけりとも人にしられん

会合有別離　　源季広

あひみてもみねにわかるゝ白雲のかゝるこのよのいとはしきかな

聞名欲往生　　寂然法師

をとにきくきみかりいつかいきの松まつらんものをこゝろつくしに

心懐恋慕　渇仰於仏

わかれにしそのおもかけのこひしさにゆめにもみえよ山のはの月

十戒歌よみ侍けるに

不殺生戒

わたつみのふかきにしつむいさりせてたもつかひあるのりをもとめよ

不偸盗戒

うき草の一葉なりともいそかくれおもひなかけそおきつしら浪

不邪婬戒

さらぬたにおもきかうへのさよころもわかつまならぬつまなかさねそ

不沽酒戒

これのみと露のうきけはかなしきわかる是はいつまでとめらるゝの心は

入道前関白家に十如是歌よませ侍りけるに

如是報　　二条院讃岐

うきも猶むかしのゆへと思はすはいかにこの世をうらみはてまし

待賢門院中納言人々にすゝめて九品の歌

よませ侍りける上品の度受蓮台生歓

喜無量の心を　　皇太后宮大夫俊成

むらさきの雲地にさそふ琴の音にうき世をはらふ峰の松風

美福門院に極楽六時の讃の絵にかくへき

奉るへきよし侍りけるによみ侍りける　時

大衆法を聞て弥歓喜瞻仰せむ

いまそこれ入日をみても思ひこしみたの御国の夕暮の空

暁到て浪の声金の岸によする程

いにしへの尾上のかねにゝたる哉岸うつ浪の暁のこゑ

百首の歌の中に毎日晨朝入諸定の心を

式子内親王

しつかなる暁ことにみわたせはまたふかき夜の夢そかなしき

発心和歌集の歌普門品の種々諸悪趣

選子内親王

あふことをいつくにてとか契へきうき身のゆかむかたをしらねは

五百弟子品の心を　　信生法師

ゑひのうちにかけしころもをさめてこそかけける玉の心をもしれ

維摩経の十喩中に此身如夢といふ心を　　素暹法師

夢やゆめうつゝやゆめとわかぬかないかなるよにかさめんとすらん

二月十五日のくれかたに伊勢大輔かもとにつかはしける　　相模

つねよりもけふのけふりのたよりにや西をはるかにおもひやるらむ

返し　　伊勢大輔

けふはいとゝ涙にくれぬ西の山おもひいりひのかけをなかめて

依釈迦遺教念弥陀といふ心を　　肥後

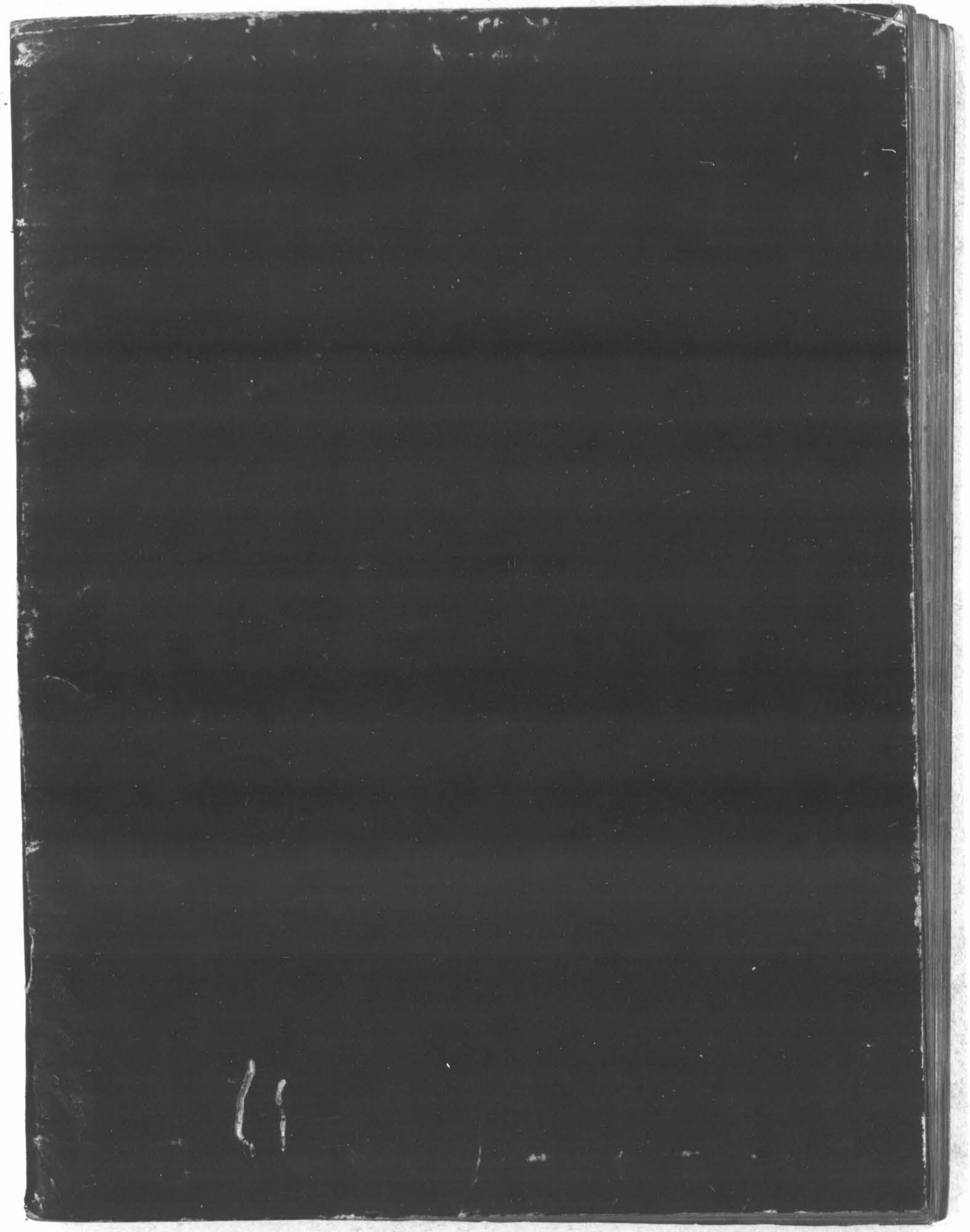
をしへおきて入にし月のなかりせはいかて心をにしにかけまし

西行法師をよひ侍けるにまかるへきよし申てまうてこて月のあかゝりけるに門のまへをとほるときゝてよみてつかはしける　　待賢門院堀河

西へゆくしるへとおもふ月かけのそらたのめこそかひなかりけれ

返し　　西行法師

たちいらて雲まをわけし月かけはまたぬけしきやそらにみえけん

人のみまかりにける後結縁経供養しける
即往安楽世界の心をよめる
瞻西上人
むかし見し月のひかりをしるへにてこよひや君か西へゆくらん
観心をよみ侍ける
西行法師
やみはれて心のそらにすむ月は
西の山へやちかくなるらん

九州大學圖書印